

八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八 坂 の 遺 跡

I

総 説
八坂久保田遺跡
八坂本庄遺跡

2003

大分県教育委員会

八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八 坂 の 遺 跡

I

総 説
八坂久保田遺跡
八坂本庄遺跡

2003

大分県教育委員会

序 文

本書は、大分県教育委員会が平成8年度から10年度にかけて実施した八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

八坂地区は、調査中の平成9年と10年に洪水被害にあいました。八坂川の治水対策は、地域の積年の課題であり、その改修事業は多くの住民の期待を集めるものでした。そのため、県教育委員会は、関係機関や地元と協議を重ねながら、調査の実施に総力を挙げて取り組んだところです。

今回、発掘調査を行った八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡では、古代から中世にかけての集落や水田遺構が確認され、その調査面積は約57,000㎡にも達しました。遺跡の所在する八坂地区は、古代の八坂郷、そして中世においては宇佐宮弥勒寺領荘園である八坂荘の中核をなす地域と認識されてきました。遺跡には、こうした八坂地区の歴史が幾層にもわたって刻み込まれており、たびたび洪水を起こす八坂川と格闘しながら、八坂の地を支えてきた先人たちの苦勞をしのぶことができます。

本書が多くの方々に活用され、文化財の保護・啓蒙、並びに歴史研究等に役立つものとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力くださいました地元八坂地区をはじめとする多くの方々や機関に衷心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

大分県教育委員会教育長

石 川 公 一

総 説

例 言

1. 本書は、八坂川河川改修事業に伴い、県別府土木事務所の依頼により大分県教育委員会が実施した八坂久保田遺跡(杵築市大字中)、八坂木庄遺跡(杵築市大字木庄)、八坂中遺跡(杵築市大字中)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成8年度から10年度の3ヶ年にわたり実施した。また、発掘調査報告書作成にむけての整理作業は、平成11年度から14年度までの4年間、大分県教育庁文化課文化財資料室にて行った。
3. 調査の実施にあたり、杵築市教育委員会の協力を得た。
4. 各遺跡の出土遺物ならびに遺構・遺物の実測図は、大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。
5. 本書の執筆は、総説を後藤一重が行い、その他については各遺跡報告部分の例言に明記した。
6. 本書の編集は、後藤一重、小柳和宏が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査団の構成	5
第2章 調査の経過	7
第3章 八坂川周辺の遺跡	12
1 旧石器・縄文時代	12
2 弥生時代・古墳時代	17
3 古代・中世	20
4 近世	22

第1章 はじめに

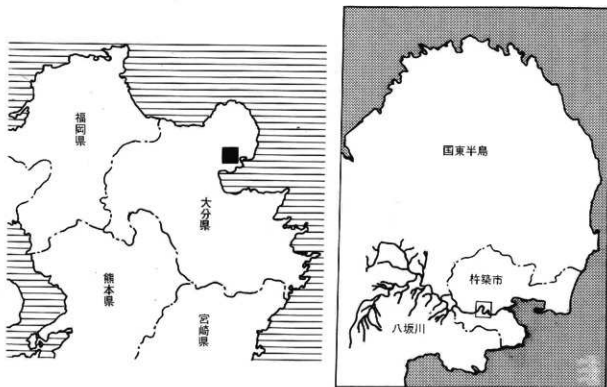
1 調査にいたる経緯

今回報告する八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡は、大分県杵築市を流れる八坂川の河川改修事業に伴い発掘調査されたものである。

八坂川は、大分県北東部に位置する国東半島の南側付け根部分を西から東に向かい流れ、杵築市の守江湾に注ぐ。その源は杵築市の西側に位置する大分県速見郡山香町内にあり、山香町内を発する久木野尾川や立石川などが合流し、杵築市内に至り八坂川となる。八坂川の全長は29.784kmで、河口付近では沖積平野を形成する。

八坂川下流域には七双子古墳群などの古墳が多数確認され、早くから本地域が国東半島南西部の拠点的な地域となっていたことが想像される。古代には八坂郷が置かれ、その後の荘園制期には宇佐宮弥勒寺領(八坂荘として宇佐神宮や宇佐宮弥勒寺との強い関係がうかがえる。中世後半には大友庶家の木付氏がこの地に勢力をもつが、大友氏の豊後除国時に滅んだ。近世に入ると、細川氏、小笠原氏に続き松平氏が入部し、杵築藩3万7000石の城下町として栄えた。八坂川河口左岸の台地上には杵築城が築かれ、城の周囲には城下町が開闢する。以上のように、八坂川下流域は歴史的にみて当地域の中核をなす地域であったことが分かる。

現在、八坂川は杵築市本庄から日野にかけて大きく蛇行する。蛇行部付近の海拔は2~4m程で、満潮時には蛇行部よりもさらに上流まで潮がのぼる。このため、大雨時に満潮を重ねると、蛇行部一帯に甚大な洪水被害をもたらす。歴史的にも永祿7年(1564)をはじめとして、江戸時代の記録にも水害の記事が頻りにみられる。主なものとして、享永4年(1707)8月18、19日の大高潮、享保14年(1729)8月19日の大洪水、宝暦12年(1762)8月8日の大洪水、享永5年(1852)8月22日の大洪水などがある。明治以降にも明治41年(1908)、昭和36年



第1図 八坂久保田・八坂本庄・八坂中遺跡位置図

(1961)、昭和51年(1976)、昭和57年(1982)に大規模な洪水被害がおきている。洪水のたびに家屋や水田に甚大な被害を被るため、八坂町の洪水対策は地域住民の長年にわたる悲願となっていた。しかし、本庄から日野にかけての蛇行部には、周囲に当地域の中核的な水田が広く展開しており、洪水対策に必要な八坂川のショートカット工事を行うには水田再編などの事業も同時に実施されなければならない状況にあった。このため、その実施には多くの地権者の理解と山積する諸課題の解決が条件となり、工事実施にむけて多くの時間を費やした。

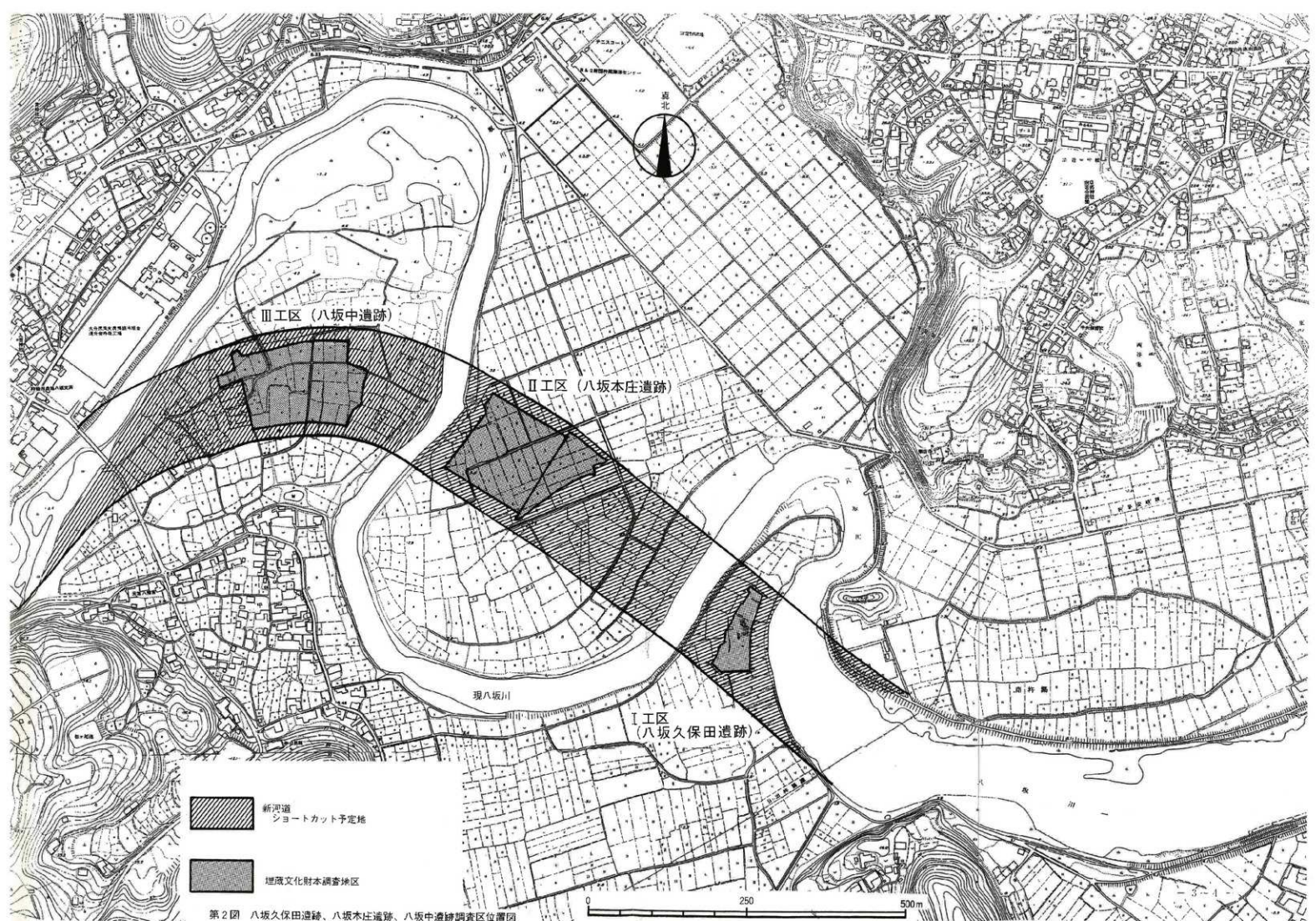
八坂川河川改修事業の着手が決まり、これに伴う遺跡の取り扱いについて県別府土木事務所から県教育委員会文化課に協議があったのは平成4年度である。すなわち、県文化課が平成4年12月24日付けで県土木建築部に対し次年度事業の照会をしたのを受けて、平成5年2月5日付けでその回答があり、八坂川河川改修事業が初めて協議のテーブルにのることとなった。県文化課は工事対象地域の分布調査を実施し、当該地区内の一部に周知遺跡の日野・中条屋遺跡があり、加えて遺跡存在の高い地区もあることが判明したため、八坂川河川改修事業地区内の試掘・確認調査が必要であることを県土木建築部に対し通知した。その後、県別府土木事務所からの試掘依頼を受け、県文化課は平成6年1月12日付けでこれを承諾し、県別府土木事務所と連絡をとりながら平成6年3月初旬に現地の試掘・確認調査に入った。しかし、用地買収の関係から進入路が確保されていないため、試掘・確認調査が実施できないことが現地にて当日判明し、県文化課としてはやむを得ず調査を中止した。

平成6年度に入り、昨年度の経緯を踏まえ、試掘・確認調査のできる環境を早急に整えるように県土木建築部企画検査室と協議を行った。これを受けて県土木建築部企画検査室、県別府土木事務所、県耕地課、県国東半島総合土地改良事業事務所、県文化課で協議を実施した結果、地元には平成11年完成で説明を行っていることが判明した。工事完成予定期日を県文化課が知るのは、この時が初めてで、試掘・確認調査ができる状況を早急に整えるように再度強く要請した。しかし、平成6年度には県別府土木事務所から試掘の依頼はなかった。

平成7年度になり事態を憂慮した県文化課は、県土木建築部企画検査室と試掘・確認調査実施にむけての協議を行った。県文化課では調査の予定で準備をすすめる、用地問題の解決と同時に調査に入る体制を整えていたが、用地の解決がみられず延び延びとなったまま、結局年度内には試掘・確認調査の実施にはいたらなかった。

平成8年度4月にいたり、調査予定地区のうちⅠ工区についてのみ用地問題がある程度解決し、4月22日～23日に試掘・確認調査を実施した。その結果、中世の柱穴などが確認され、その旨の回答を県土木建築部企画検査室ならびに県別府土木事務所へ通知した。この段階では、他のⅡ工区、Ⅲ工区の状況はまったく把握されていなかったが、県別府土木事務所より八坂川河川改修事業に伴う本調査、試掘・確認調査の依頼が平成8年5月23日付けで提出された。県文化課は平成8年6月20日付けでこれを受諾し、現地調査の準備に掛かった。しかし、その後の県別府土木事務所との協議で、Ⅱ工区、Ⅲ工区の試掘・確認調査を優先するようという要望もあり、本調査と併行するかたちで各工区の調査を鋭意進めることとなった。

以上のように、工事対象地区の用地問題などで紆余曲折があったものの、最初の協議があった平成4年度から足掛け4年日にしてやっと調査が開始されるにいたった。しかし、様々な問題がすべて解決した状況での調査開始ではなかったため、調査開始後も県土木建築部企画検査室、県別府土木事務所、県国東半島総合土地改良事業事務所と必要に応じて協議を重ね調査を行っていた。詳細については、「第2章 調査の経過」を参照願いたい。



第2図 八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡調査区位置図

2 調査団の構成

・平成8年度（役職は当時のもの）

調査主体	大分県教育委員会		
調査指導員	別府大学文学部教授 立命館大学文学部教授 大分短期大学助教授		飯沼賢司 高橋学章 佐々木章
調査員	大分県教育委員会教育長 大分県教育庁文化課課長		田中恒治 後藤一郎 野田武志
	同 課長補佐		後藤一郎 野田武志
	同 主幹兼埋蔵文化財第2係長		清谷忠章
	同 主査		西哲弘
	同 主査		波辺重昭
	同 主査		栗原眞
	同 主任		小柳和宏
	同 主任		松本康弘
	同 嘱託		濱田教靖

・平成9年度

調査主体	大分県教育委員会		
調査指導員	別府大学名誉教授 別府大学文学部教授 別府大学文学部教授 立命館大学文学部教授 大分短期大学助教授		賀川光夫 後藤宗俊 飯沼賢司 高橋学章 佐々木章
調査員	大分県教育委員会教育長 大分県教育庁文化課課長		田中恒治 後藤一郎 田原基之
	同 課長補佐		秋吉心良
	同 課長補佐		清水宗昭
	同 主幹兼埋蔵文化財第2係長		清水宗昭
	同 埋蔵文化財第1係長		高橋徹
	同 副主幹		村上久和
	同 主査		波辺重昭
	同 主査		後藤一郎
	同 主査		甲斐寿義
	同 主任		綿貫俊一
	同 主任		吉田寛
	同 主任		永井実
	同 主任		青藤善
	同 主事		藤内寿竹
	同 嘱託		藤内寿竹
	同 嘱託		濱田教靖

・平成10年度

調査主体	大分県教育委員会		
調査指導員	別府大学名誉教授	賀川光夫	川 光 夫
	別府大学文学部教授	後藤賢司	後 藤 賢 司
	別府大学文学部教授	飯沼学章	飯 沼 学 章
	立命館大学文学部教授	高橋学章	高 橋 学 章
	大分短期大学助教授	佐々木正巳	佐 々 木 正 巳
	たたら研究会会員	大澤恒治	大 澤 恒 治
調査員	大分県教育委員会教育長	田中恒一郎	田 中 恒 一 郎
	大分県教育庁文化課課長	後藤基之昭	後 藤 基 之 昭
	同 参事兼課長補佐	田原勝弘	田 原 勝 弘
	同 課長補佐兼埋蔵文化財第2係長	清水哲弘	清 水 哲 弘
	同 主幹	栗田重義	栗 田 重 義
	同 副主幹	西村一実	西 村 一 実
	同 主査	後藤俊一	後 藤 俊 一
	同 主査	甲斐桂司	甲 斐 桂 司
	同 主査	綿井実司	綿 井 実 司
	同 主任	渡部杉太	渡 部 杉 太
	同 嘱託	若杉保春	若 杉 保 春
	同 嘱託	東野真由美	東 野 真 由 美
	同 嘱託	平野真由美	平 野 真 由 美

第2章 調査の経過

◎平成8年度

- ・ 7月2日 II工区（八坂本庄遺跡）の試掘調査を開始する。
- ・ 7月12日 II工区（八坂本庄遺跡）の試掘調査終了。
工事対象地のうち、東側の約30,000㎡については日立った遺構・遺物が検出されず、工事着工を認める。残りの部分については、本調査の対象とする。
- ・ 8月21日 八坂本庄遺跡のうち約6,500㎡（II a区）の調査を開始する。
- ・ 11月26日 III工区（八坂中遺跡）の試掘調査開始する。
- ・ 12月6日 III工区（八坂中遺跡）の試掘調査終了。
工事対象面積約75,000㎡のうち、西側約31,000㎡については日立った遺構・遺物が確認されず、本調査の対象外とする。
- ・ 3月26日 平成8年度における八坂本庄遺跡の調査終了。
約6,500㎡の調査区のうち、約3,000㎡は下層に水田遺構の存在する可能性があるのさらに掘り下げが必要。残りの部分については、12世紀前半と16世紀の集落部分で、一部を除いて調査は終了。

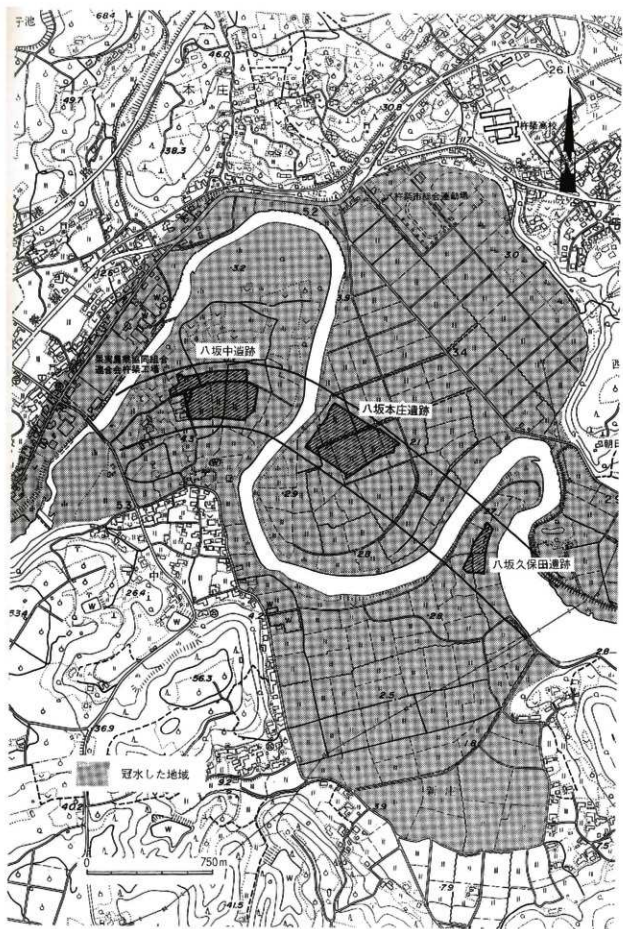
◎平成9年度

- ・ 5月12日 平成9年度の調査開始。
昨年度調査を実施した八坂本庄遺跡II a区における下層水田の調査を開始する。併行して、土層実測や液状化に伴う噴砂の検出、実測を行う。
- ・ 5月22日 バックホーを使用し、調査区の掘り下げ開始。
バックホーにより数十cm下げた後に、手掘りにより慎重に掘り下げる。最下層の水田と思われる小区画水田の畦畔を検出するが、後に疑似畦畔の可能性が高いことが分かる。
- ・ 6月11日 佐々木学大分短期大学助教授によるプラントメーバル調査。
- ・ 6月20日 県土木建築部と今後の調査についての協議を行う。
調査の迅速化のため県文化課の調整をはかり、現行の1パーティーから2パーティー体制にすることが決定。
- ・ 7月23日 八坂本庄遺跡II a区の西側約20,000㎡（II b区）の表土剥ぎを開始。
- ・ 8月18日 I工区（八坂久保田遺跡）約9,000㎡の表土剥ぎを開始。
- ・ 8月20日 県土木建築部と今後の調査についての協議を行う。
新河川の築堤部は調査対象から除外することとする。また、以前より問題になっていた、調査区の現河川流路からの控えについては、安全確保のため30mとし、この部分も調査対象外とした。
- ・ 9月16日 台風19号のため八坂川大洪水。
台風19号は強い風雨を伴い県下を直撃した。大分県に最接近したのは16日午後で、八坂川は満潮とも重なり午後3～4時にいたり大きく氾濫した。浸水の被害を被った地域は杵築駅付近より下流の広範囲におよび、特に発掘現場周辺の本庄、新庄の地域は数haにわたり冠水した。その水位は現場付近で1mにも達し、床上浸水家屋数十棟を含め、家屋や田畑、道路に大きな被害をもたらした。地域の人々によれば、今回の洪水は戦後最大規模のものであると言う。
調査現場でも、八坂久保田遺跡のプレハブが流され、拠点のプレハブも床上浸水するなど大きな被害を被った。また、現場進入路の寸断、調査区内への土砂堆積など調査へも大きな影響をも

- た。八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡が災害以前の状況に戻ったのは10月初旬である。
- ・10月3日 賀川尤夫別府大学名誉教授現地指導。
 - ・10月20日 八坂公民館にて今後の調査に関する地元説明会開催。
9月16日の洪水をきっかけに、八坂川河川改修事業の進捗状況に対する声が地元より多く出される。原別府土木事務所と原文化課はこれまでの正確な経緯を説明するとともに、今後の河川改修事業と発掘調査の推進に地元の理解を求めた。
 - ・11月4日 Ⅲ工区の簡足的な試掘調査開始。
 - ・11月7日 Ⅲ工区の簡足的な試掘調査終了。
Ⅲ工区（八坂中遺跡）の詳細な遺構分布と密度を把握する。加えて、土質を検討し現河川流路と調査区までの控えの長さを再検討した。以上をふまえ、八坂中遺跡の本調査対象地の新たな線引きを行った。
 - ・11月27日 県土木建築部と今後の調査についての協議。
発掘調査の終了時期について、Ⅰ工区（八坂久保田遺跡）は平成10年3月、Ⅱ工区（八坂本庄遺跡）は平成10年5月、Ⅲ工区（八坂中遺跡）は平成11年5月とする。
 - ・12月18日 八坂公民館にて今後の調査に関する地元説明会開催。
11月27日に決定した各工区の発掘調査終了時期と、八坂川河川改修事業の今後の工程について地元へ説明。
 - ・1月20日 Ⅲ工区（八坂中遺跡）の表土剥ぎ開始。
 - ・1月28、29日 高橋学立命館大学教授現地指導。
 - ・1月30日 調査指導委員会開催。
賀川尤夫別府大学名誉教授、後藤宗俊別府大学教授、飯沼賢司別府大学教授、佐々木章人分短期大学助教授により、今年度の調査成果と次年度に向けての課題を検討。
 - ・2月1日 八坂本庄遺跡・八坂久保田遺跡現地説明会開催。
百数十名の参加があり、両遺跡と出土遺物を熱心に見学した。
 - ・3月27日 本年度の調査終了。
八坂久保田遺跡は一部の河面実測を除き終了。また、八坂本庄遺跡は集落部分の調査が終了したが、水田部分の調査は未了。八坂中遺跡はB地区（東半分）の表土剥ぎが終了。

◎平成10年度

- ・4月6日 八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡の調査再開。
- ・4月20日 八坂久保田遺跡本日をもち調査終了。
調査委員会開催
八坂本庄遺跡において中世の水田が良好な状況で検出されたため、後藤宗俊別府大学教授、飯沼賢司別府大学教授の指導を受ける。
- ・5月15日 八坂本庄遺跡の中世水田及び古代水田について、賀川尤夫別府大学名誉教授の指導を受ける。
- ・5月18、19日 八坂本庄遺跡の中世水田及び古代水田について、高橋学立命館大学教授の指導を受ける。
- ・5月26、27日 4、5月に雨が多かったことと、古代の水田が良好な状態で確認され始めたこともあり、八坂本庄遺跡の調査終了が当初の予定である5月末から延びることを、各地区の換地委員長・区長宅に個別に説明に行く。八坂川河川改修事業に伴う全体の発掘調査の終了は当初の予定時期と変わらないことから、八坂本庄遺跡の調査延長については大方の理解を得る。また、工期変更の経緯を広く地域住民に周知するため「八坂川発掘調査ニュース」の発行を行うことにする。「八坂川発掘調査ニュース」は以後月1回のペースで発行された。



第3図 平成9年9月16日 八坂川洪水被害状況

- ・ 7月6日 八坂本上遺跡の調査終了。
- ・ 7月24日～ 飯沼賢司別府大学教授水田水掛り、地名聞き取り調査。
- ・ 7月27日 梓藩市内小学生40名が八坂中遺跡で、発掘体験学習。
- ・ 8月7日 八坂中遺跡A地区（調査区の西半分）のうち、農道から北側が終了し工事に引き渡す。
- ・ 9月9日 八坂中遺跡A地区の残りの部分について表土剥ぎ開始。
- ・ 9月30日 八坂中遺跡B地区（東半分）の調査終了。工事に引き渡す。
- ・ 10月17日 台風10号による大雨で八坂川が洪水。八坂中遺跡も浸水する。現場プレハブ床下浸水であったが、周辺の機材に被害が出る。また、現場のシートが流失し周辺の水田まで流れていたため、雨のあがった翌日は日曜日であったが片づけを行う。現場は調査区全体が水没し、かつ多量の土砂流入も認められ、すぐには調査が再開出来ない状況であった。
- ・ 10月26日 調査区内の水がひき、この日より作業再開。しかし、調査区全面にわたり土砂の堆積がみられる。
- ・ 11月4日 八坂中遺跡調査区西側を試掘調査。
方形に溝をめぐらす層館が連なっている状況が確認されているため、調査区西側にも及ぶ可能性が生じた。試掘調査の結果、家屋解体時の攪乱が著しかったが、中世まで遡る溝は確認されなかった。
- ・ 1月19日 たたら研究会会員の大澤正己先生に検出された鍛冶炉の指導を受ける。
- ・ 2月13日 八坂中遺跡の現地説明会開催。200名以上が集まり盛況であった。
- ・ 3月1日 調査指導委員会開催。
賀川光夫別府大学名誉教授、後藤宗俊別府大学教授、飯沼賢司別府大学教授にこれまでの調査成果を説明し指導を受ける。
- ・ 3月9日 大分県立歴史博物館の山田拓伸氏の指導で、鍛冶炉の切り取りを行う。
- ・ 3月26日 八坂中遺跡調査終了。
本日をもち、当初の予定であった平成11年5月末よりも2ヶ月早く調査を終了。
また、平成8年度に開始された八坂川河川改修工事に伴う本調査もすべて終了した。調査途中の平成9年9月16日と平成10年10月17日に、八坂川が大きな洪水を起こしたこともあり、県土木建築部では工事の工程を早めざるをえなくなった。そのため、土木建築部との協議のなかで調査の体制等も見直され、当初の予定よりも大幅に短縮して調査を終了した。

八坂川発掘調査 ニュース

1998年12月

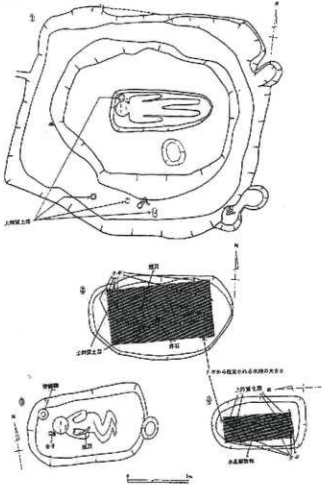
大分県教育委員会

今年の冬は夏がかったり、夏がかったりで妙に感じず、湿度、気温を行っている夏予(八坂川遺跡)では、調査を終了し集約することで開始されています。この調査も冬まで進んでいるところで。

①遺跡(八坂川遺跡)の調査では、数多くの遺構、遺物が検出されています。そのなかで今回は注目しているのが、現在まで発掘された遺構は20数枚に及び、時代的には平安時代から江戸時代にかけてのもので、江戸時代のもので「八坂川発掘調査ニュース」で既に紹介した、水争いの犠牲者となったと思われる遺構です。そのほかについては、平安時代(約900年前)と鎌倉時代(約1200年前)の土器や土間をそのまま残した土蔵(どこと)と推定されるもの。一度には、遺体を収容する形で利用した穴埋溝(もっかんぼ)もみられました。これらの遺構は、発見づつ積み重なって来ています。いずれも独立した遺構(はじめて掘られたもの)に由来して出来ており、階状に内側あるいは遺構間に隣接してつくられる遺構(くしきばか)とされるものです。これらの遺構の築造者は、発掘の場々で出土した製られた土器(もっかんぼ)もみられました。同様に築造したと思われる実在な時代の場所にも見られるものと推定されます。これらの遺構には、江戸時代のように立派な遺構のみならず、かなり古くは平安時代の遺構もみられることが分かります。

②このうちの遺構のうち、①に先づいて掘られた土蔵遺構です。他の土蔵が埋められ土蔵跡をもちいた心流へ、平たいくわいでつくられていることが分かります。この遺構は江戸時代の遺構が良好で、調査終了後に復元され、展示場に向け修復されています。現在の遺構には、遺構中に埋められた土蔵である土蔵跡(土蔵の土蔵を埋められたもの)もみられるようにしたものが多く見られます。遺構中に埋められたものは、木製の土蔵に木製の土蔵(もっかんぼ)もみられます。この遺構から、土蔵の土蔵を埋められたことが分かります。土蔵跡が埋められており、遺構に木製の土蔵跡が埋められたことが分かります。土蔵跡は、土蔵跡の遺構には、遺構の土蔵跡(もっかんぼ)もみられるようにしたものが多く見られます。遺構中に埋められた土蔵跡(土蔵の土蔵を埋められたもの)もみられるようにしたものが多く見られます。遺構中に埋められた土蔵跡(土蔵の土蔵を埋められたもの)もみられるようにしたものが多く見られます。

八坂川遺跡で検出された土蔵



検出された土蔵の断面図(概略)



検出された土蔵の断面図(概略)



八坂川発掘調査 ニュース

1999年1月

大分県教育委員会

①遺跡(八坂川遺跡)の調査も調査をむかえ、遺跡の全容がだんだん明らかになってきました。現在は、鎌倉時代の遺構を掘り進めています。遺構より土蔵跡もみられた方が多いように、人がすっぽり入る土蔵の遺構も、掘り進められたり穴を空けて掘り進められています。作業員さんにはハードな作業内容になっていますが、3月末の調査終了に向け、頑張り続けていただいている作業員さんに感謝いたします。

②今回は第三次(八坂川遺跡)の調査で検出された土蔵跡の遺構、遺物について紹介します。土蔵跡からは土蔵跡(かじり)が4基確認されました。うち3基は、一層の土蔵跡とみられます。遺跡跡では、土蔵跡(かじり)の遺構もみられます。遺跡跡からは、土蔵跡(かじり)の遺構もみられます。遺跡跡からは、土蔵跡(かじり)の遺構もみられます。遺跡跡からは、土蔵跡(かじり)の遺構もみられます。遺跡跡からは、土蔵跡(かじり)の遺構もみられます。

③発見された土蔵跡のうち、土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。完全な状態で検出されたのは、土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。

④土蔵跡(八坂川遺跡)の調査、土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。土蔵跡(かじり)の遺構もみられました。

第3章 八坂川周辺の遺跡

1 旧石器・縄文時代

別府湾に面する国東半島南部地域において、旧石器時代の遺跡といえは早水台遺跡が著名である。早水台遺跡では、数次にわたる調査が実施され、前期旧石器としての位置付けが議論されてきた。近年においても東北大学による調査が行われており、その動向が注目されるところである。東北地方の一連の前期旧石器時代遺跡が程度と分かり、日本における前期旧石器時代研究が振り出しに戻った今、新たな研究の出発点になりうるかもしれない。早水台遺跡の周辺には同様な遺跡が分布するとされるが、その実態は不明である。

早水台遺跡周辺から数km東に位置する八坂川周辺では、良好な旧石器時代遺跡は確認されていない。早水台遺跡周辺と似たような地形を呈する部分もあり、今後の調査・研究に期したい。しかし、当地域を含む国東半島地域は、旧石器時代遺跡が集中する大分県西部の大野川流域のように火山灰の発達が顕著でなく、遺跡の条件としては必ずしも良好ではない。加えて、昭和30年代以降盛んに実施されたミカン園造成のパイロット事業のため、丘陵部は改変が著しく、遺跡が存在したとしてもすでに破壊されている可能性も高い。

縄文時代になっても、遺跡の数としてはそれほど増えない。これらの遺跡のうち、早期などの古い段階のものは丘陵上に立地し、後期以降のものは沖積地に近い標高の低い部分に位置する。このような遺跡立地の相違は、自然環境の違いからくるものと考えられる。早期段階は海面が低下しており、海岸線は現在よりもかなり沖に位置していたと推定される。このため、当時の低地遺跡は現在の海面下、または沖積地の厚い沖積層下に埋没していると考えられ、丘陵上に位置した遺跡のみが現在発見されているものであろう。前期以降の海進期には、海岸線が逆に後退し、現在の沖積地の多くは海面下になっていたと思われる。この状態は長く続き、後期以降みられるいくつかの貝塚は、このような海の資源に依存した遺跡の状況を物語る。

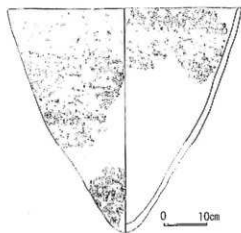
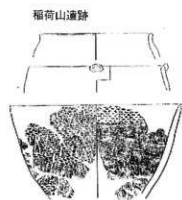
以下、縄文時代の主要な遺跡をみてみよう。稲荷山遺跡は、守江湾を見下ろす標高43mの丘陵上に位置する。遺跡は昭和42年に発掘調査が実施され、小面積ながら多くの遺物が出した。出土遺物には土器、石器がみられる。土器は押型文土器、無文土器などで、無文土器が90%ちかくを占める。無文土器には厚手のものと薄手のものがあり、口縁形態にもいくつかのバリエーションが認められる。また、口縁外面に瘤上の貼り付けがあるものもみられる。押型文土器は尖底で、内外面に山形や楕円などの小型押型文が施文される。外面は横方向の施文が全面にみられ、内面は口縁下のみ縦方向の施文をする。以上の土器群は稲荷山式土器として、ベルト状施文の川原田式の次に位置付けられており、押型文土器の中でも古相の一群としてとらえられる。石器では石鏃の占める割合が多く、当時の生業を反映したものであろう。

前期、中期には目立った遺跡は認められず、後期になりいくつかの貝塚がみられるようになる。神領貝塚は八坂川右岸側にあり、河辺からやや距離をもつ丘陵部に位置する。本遺跡は周知されていなかったが、圏場整備事業実施に伴う事前の試掘調査で確認された。貝塚は現標高約3mのところ位置し、100×50mの範囲に貝層が広がる。貝層の厚さは約30cmを測り、ハマグリ、カキ、アサリ、ヘナタリ等の鹹水産貝類が主体を占めた。遺跡は範囲確認のため一部をトレンチ調査の後、現状保存されることとなり埋戻された。出土土器は、九州在地の土器である阿高式系の西和田式土器に加え、瀬戸内系の中津式などがみられる。

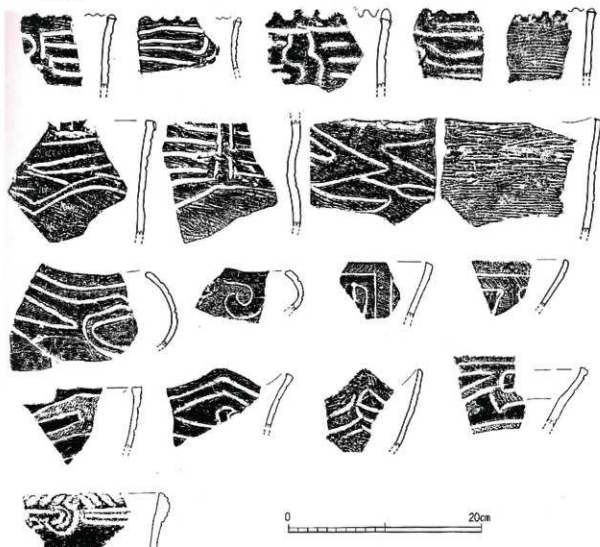
神領遺跡と同様な時期の貝塚として山辺貝塚がある。貝塚は八坂川流域ではなく、同じ守江湾に注ぐ高山川流域に位置する。高山川河口から直線距離で約3kmを測る位置にあり、台地先端の平地地で、標高は約7mである。この貝塚は、1987年に圏場整備事業の実施に伴い発見されるまでは全く周知されていなかった。発見時には、工事によりすでに壊滅的に破壊されており、工事中の盛り土などから多くの土器が採集された。また、圏場整備事業地区内の道路沿いに貝層の一部が残されており、その部分から貝類などもサンプリングされている。それによれば、鹹水産のハイガイ、ヘナタリ、マガキなどが主体を占めており、現在よりも海岸線がかなり内陸に入ってい



第4図 八坂久保任遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡と八坂川周辺の遺跡

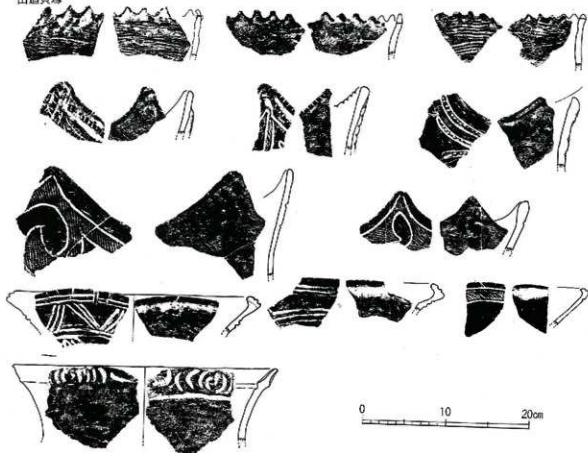


神領貝塚

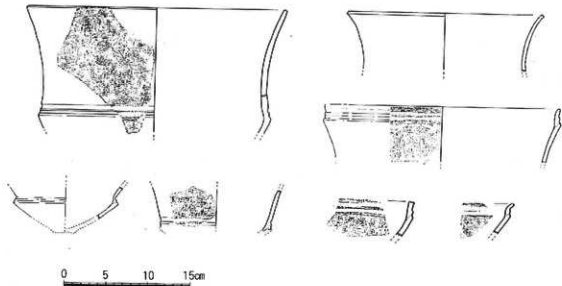


第5図 八坂川周辺の遺跡(1)

山泊貝塚



東貝塚



第6図 八坂川周辺の遺跡(2)

たことが分かる。土器は瀬戸内系の中津式、福岡Ⅱ式などと、九州在地の何高式系、コウゴウ式がみられるなど複雑な様相を呈する。これらの土器が示す後期初頭から前期にかけては、瀬戸内地方から唐瀬式土器が伝播するなど新たな波が九州に押し寄せてくる。九州の縄文時代を通じてもひとつの大きな画期としてとらえられる。先の神領貝塚と併せ、山道貝塚はこの激動の時代の始まりを告げる時期の遺跡である。

東貝塚は神領貝塚の西側に位置しており、標高は2～3mを測る。時期は後期後半で、門線文系の三方田式土器が単純に出土する。宮内克己氏は、これらの土器群を東式として型式設定している。東式に併行する大分県内陸部の土器として、朝地町池在遺跡出土土器がある。両者の土器を比較すると、東式の粗製深鉢の調整がナデや巻貝などによる貝殻条痕多用されるのに対し、池在遺跡ではナデの後に研磨を施す。東式のこのような特徴は広く瀬戸内共通するもので、土器の面からみれば内陸部と区別される。また、伴出する石器についてみると、東貝塚では扁平打製石斧が確認されていない。後期後半から晩期にかけて内陸部の遺跡からは多量の扁平打製石斧が共通して出土するが、海岸部では著しく少ない傾向にある。扁平打製石斧が何らかの植物栽培と強い相関関係にある可能性が高い状況を考えれば、上記の内陸部と海岸部の違いは、両地域の植物栽培依存度の高低を表すものであろう。

2 弥生時代・古墳時代

八坂川流域をはじめとする当地域において、弥生時代の遺跡はあまり確認されておらず調査例もない。八坂川下流や高山上流に展開する広大な沖積平野が、陸化し安定するまで時代が下ったこともあるが、遺跡は現在の海岸線よりもかなり内陸に入った地域に展開するものと考えられる。後の古墳時代における古墳の展開を考慮にいれると、弥生時代段階から活発な開発が進められていたものと推定される。弥生時代の遺跡・遺物が少ない当地域にあって、新宮遺跡出土の細形銅剣は注目される。

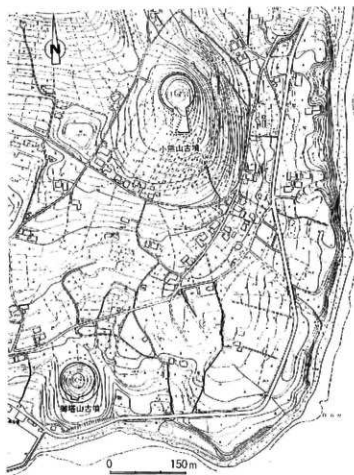
古墳時代になると遺跡数は激増する。なかでも古墳の数が目をひき、その数だけで言えば、県下でも有数の古墳集地域といえる。しかし、集落については弥生時代同様、その実態はまったく不明である。

古墳時代前半期をみると、大分県内における代表的な大型の前期古墳である小熊山古墳と御塔山古墳が出現する。いずれも海を強く意識したもので、古墳の性格を考えるうえに興味深い。小熊山古墳は、全長120mの前方後円墳で、県下でも最大級の規模を有するものである。内部主体は調査されていないが、墳丘の調査などが実施され古式の埴輪が検出されている。時間的には4世紀中頃に位置付けられる。御塔山古墳は小熊山古墳に近接した位置にある。墳形は作り出し付きの円墳で、径約80mを測る。墳形こそ前方後円墳でないが、その規模は前方後円墳に匹敵するものである。時間的には、小熊山古墳よりも下って4世紀末から5世紀初めに位置付けられる。小熊山古墳、御塔山古墳については、県下全域からみても有力な首長墳としてとらえられ、当時の政治動向を考えるのに重要な古墳となっている。また、両古墳を擁する本地域の位置付けについても、改めて吟味する必要がある。

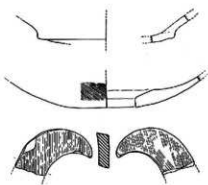
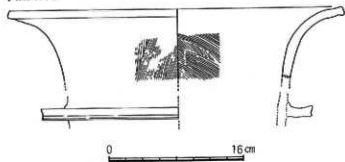
このほかの前半期の古墳として、八坂川流域の重光古墳がある。箱式石棺を内部主体にもつもので、石棺から板文鏡、方格規矩鏡各1面と勾玉が出土している。時間的には5世紀代に位置付けられる。

古墳時代後期になると、平野部や沿岸部の丘陵上に多くの古墳が築造される。それらの多くは群集墳という形態をとり、県下でも有数の群集墳集り地帯となっている。現在約90基が確認されるが、ミカン園造成などで破壊されたものも多いと思われ、盛期にはさらに多数の古墳が存在したものと推定される。主なものとして七反丁古墳群(8基)、大平古墳群(4基)、的場古墳群(4基)などがある。これら古墳群の地域的な分布をみると、高山上流域、八坂川流域、奈多・狩宿地域の3地域に分けてとらえることができる。奈多・狩宿地域は海に面した地域で、他の2地域とは異なり海部的性格が強いものと考えられる。

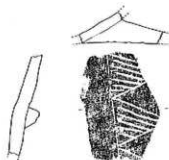
高山上流域で注目されるのは、シラハケ古墳である。竪穴式石室を有する円墳で、石室内から銅咄脇頭大刀が



小黒山古墳

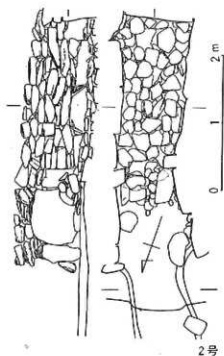
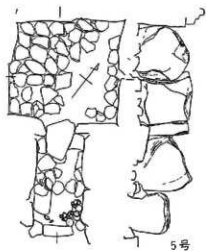


御塔山古墳

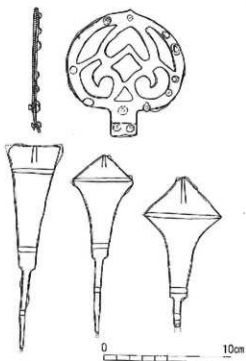
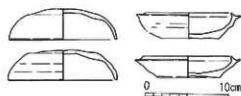
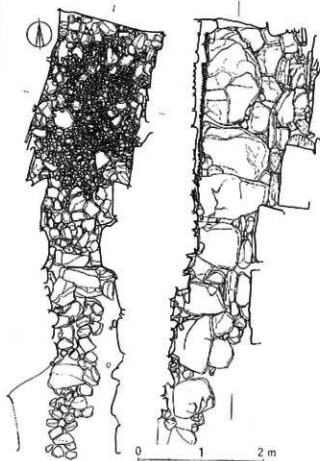


第7図 八坂川周辺の遺跡(3)

七双子古墳群



的場2号墳



第8図 八坂川周辺の遺跡(4)

出上している。古墳群は、現在の溝井、鴨川のあたりに集中しており、この地域が高山川流域における拠点的な地域であったと考えられる。

八坂川流域には、七双子古墳群や的場古墳群などがみられる。七双子古墳群は発掘調査が実施され、6世紀中葉～後半の横穴式石室墳が確認されている。石室形態は3形態あり、遺物には須恵器、鉄器、馬具、干類、銅環、銅剣などがある。これらは、群衆墳の構造や造営集団を知る上で貴重な資料となる。的場古墳群は4基のうち1基が調査された。調査された2号墳からは香葉などが出土しており、7世紀初頭の造営で7世紀第一四半期に埋葬行為が終了したと考えられている。八坂川流域の古墳群は、地理的狀況から八坂地区グループ、本庄地区グループ、南村築地区グループに分けられる。この中で、本庄地区グループは総計28基と最も数が多く、八坂川流域のなかでも中核的な地域であったことが分かる。

奈多・狩宿地域では、円墳で横穴式石室を有する大塚古墳の遺物が知られている。遺物は金・銀環、玉類、刀子などである。この地域は、古墳時代前半期に大型の古墳が築かれ当地域をリードしたが、後期になるとその優位性は影を薄めてくる。

3 古代・中世

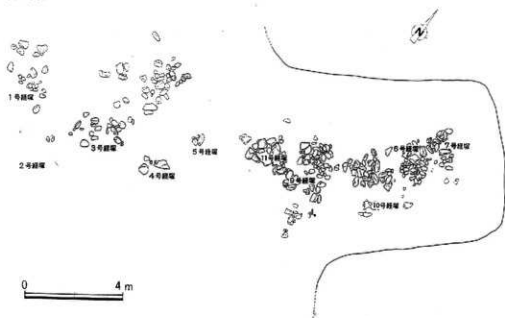
古代には、八坂川流域をはじめとする村築市の多くの地域は、速見郡八坂郷として位置付けられる。現村築市域のうち八坂郷以外では、大川平が速見郡山脊郷に、鹿倉・福原が速見郡大神郷に、高山川以東の大内・奈狩江が国崎郡安岐郷に各々属した。後期古墳の段階では、八坂川流域のうちでも本庄地区の優位性が認められたが、八坂郷の名称からも分かるように、古代律令制期にいたっても本庄地区を代表するような八坂川流域が郷の中核をなしたものとする。本庄地区周辺の八坂南岸には日野・中桑里が展開しており、郷の中心的水田であったことが分かる。

平安時代になると、八坂郷は宇佐宮弥勒寺領荘園の八坂荘となる。八坂荘はその後、八坂上荘（本荘）、八坂下荘、八坂新荘に分かれるが、その時期は平安時代末期頃であろうと考えられている。「弘安園田帳」によると、「八坂庄二百町宇佐宮弥勒寺領」とある。八坂荘は200町にもおよび、これが本荘55町、下荘100町、新荘40町、若宮名5町2反に分かれていた。本荘は上荘と呼ばれ、御家人である八坂氏が地頭職を得ていた。八坂氏は本来大神一族で、八坂荘に地頭職を得て八坂氏を名乗った。下荘は100町と最も大きい、「領家八幡檢校法印女子」とあるのみで地頭の記載はない。また、新荘についても本庄河原、地頭職は八坂氏もっていた。若宮名は大夫兵衛入道（頼泰）の領とされており、本荘に属するものの守護領になったため別名のない扱いを受けているようである。以上の荘地の現地比定をすれば、本荘が現村築市大字本庄周辺であると推定される。これは、本庄の大字名を残すことと、古墳の分布や桑里水田の展開など、古墳時代以来八坂川流域のなかでも中核的な位置を占めてきたことから傍証される。下荘は、高山川下流域右岸の低地などを中心とした地域と考えられる。高山川下流域には桑里水田が残る。新荘については、その名称から最も遅れて立券されたものであろうことが想像される。現在、八坂川右岸の村築市大字日野のなかに新荘の地名があり、この付近を中心としたことが推定される。

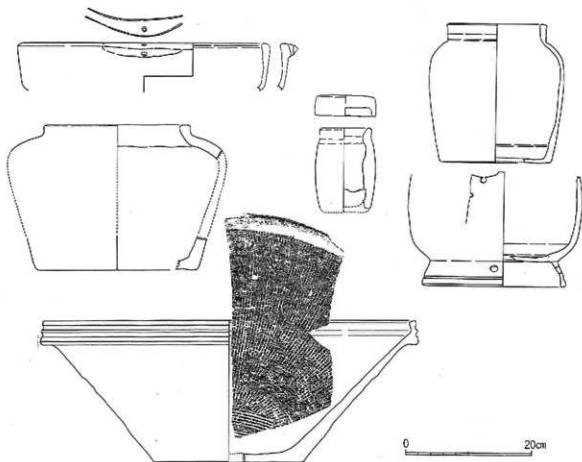
中世後半には、木付氏が本地域を領する。木付氏は、大夫氏庶家のひとつで、大夫2代親秀の子親重を祖としている。木付氏は弘安8年（1285）以降、八坂下荘に地頭職を得て入部したのが始まりで、以後上荘、新荘など八坂荘全体に勢力を拡大したのと思われる。大夫氏を交える有力庶家として幾多の合戦に加わり奮戦するが、文禄2年（1593）の大夫古統豊後陰謀に際し、木付統直が白刃し木付氏は滅亡した。木付氏の遺領は、豊臣秀吉の命により檢地が行われ、文禄4年（1595）に前田玄以、慶長元年（1596）に杉原長房、慶長2年（1597）に早川長敏が各々入部したと伝えられる。続く慶長4年（1599）には細川忠興の領地となり、家臣の松井康之が木付に入る。

以上のように、本地域の古代から中世の動静については文書資料で追うことができるが、考古学的にはこの間

東光寺経塚群



杵築小学校校内遺跡



第9図 八坂川周辺の遺跡(5)

に相当する遺跡が調査されておらず不明な部分が多い。しかし、今回調査された八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡は古代から中世に及ぶもので、考古学の備から古代・中世の八坂の歴史を明らかにできるものと思われる。

この他では、八坂地区とはやや離れた杵築市横城地区において東光寺経塚群が調査されている。横城地区は四国郡安岐郷に属しており、六郷満山の中山本寺である横城山東光寺が現存する。平成4年に東光寺裏山で土砂採取が行われた際に、銅製経筒が出土し遺跡が発見された。その後調査が実施され、十数口の経筒が検出された。この調査により、六郷満山寺院における経塚の実態が明らかになり、経塚研究及び六郷満山研究に貴重な資料を提供することになった。

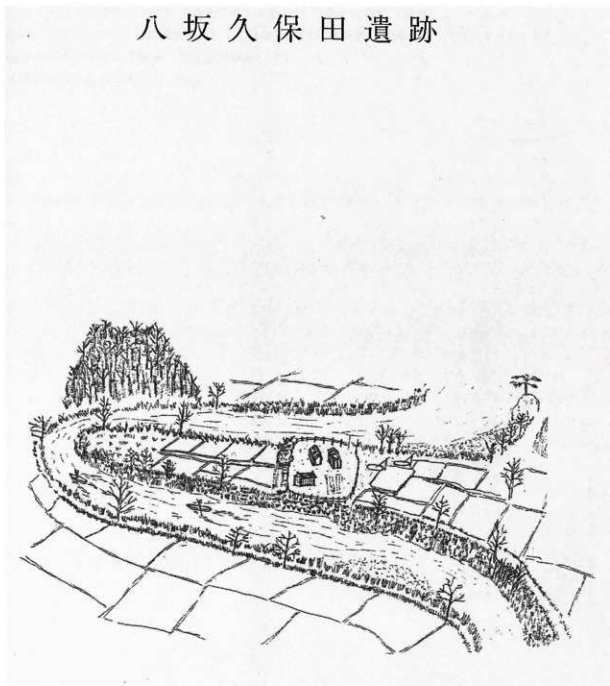
4 近世

近世初頭の杵築は細川氏の知行地とされ、城代の松井康之を置いた。寛永9年（1632）に細川氏が肥後熊本に転封すると、小笠原忠知が入部し木付藩が成立した。その後、小笠原忠知は正保2年（1645）に三河国に移り、代わって譜代大名の松平英親が3万7千石で入る。以後、幕末まで松平氏の支配が続く。なお、現在使用されている「杵築」の地名は、正徳2年（1712）に幕府が藩に与えた朱印状に杵築と書いてあったことによる。それまでは、中世以来の「木付」という字を使用していた。

杵築城は、八坂川河口の台地上にある要害の城であるが、現在では復元された天守閣があるのみである。城下町は城の北側に展開しており、台地上には主に武家屋敷が並ぶ。町屋は台地の下に広がり、新町、西町、中町、谷町、下町、魚町の6町があった。藩は城下を支配する機関として町奉行をおいた。さらに奉行は、町の有力な商人の中から宿老を任命し、町政の最高責任者とした。

城下町の中の考古学的調査はあまり行われていないが、昭和61年に杵築小学校建設に伴い発掘調査が実施された。同校の位置する北台地区は、城下において南台地区とともに武家屋敷が集中する地域である。杵築小学校の一部は藩校学舎館の跡地とされ、小学校の正門は学舎館時代のものを使用している。調査は校舎改築に伴い実施され、大量の遺物とともに遺構が確認された。残念ながら藩校の遺構は確認されなかったが、屋敷の境界を示す溝状遺構や火災の跡を示す焼土層が検出された。

八坂久保田遺跡



例 言

- 1 本編は八坂川河川改修事業に伴うⅠ工区の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、一部日野・中条里遺跡にかかるが、遺跡の内容を鑑み小字名から八坂久保田遺跡とした。
- 3 報告で使用する方位はいずれも真北である。磁北は真北から偏差西偏 $6^{\circ} 0'$ である。
- 4 遺物の実測・トレースには調査員に加え、細川愛(県文化課嘱託)、佐藤勇次(別府大学学生)が行った。
- 5 遺物観察表の作成は堤真子(県文化課嘱託)が行った。
- 6 本編の執筆は後藤一重が行った。

目 次

第1章	はじめに	23
1	調査の概要	23
2	調査の体制	23
第2章	調査の経過	26
1	掘立柱建物跡	26
2	井戸	32
3	土版	45
4	溝	56
5	水田遺構	59
6	その他の出土遺物	62
第3章	まとめ	71

第1章 はじめに

1 調査の概要

八坂久保田遺跡は、大分県杵築市大字中宇久保田に所在する。

遺跡は八坂川が大きく蛇行する部分に位置し、調査前の標高は2～3mである。平成14年に行われた試掘調査の結果、12世紀前後の遺物とともに柱穴などが確認された。河川改修工事は蛇行部のショートカットということで、保存措置をとることが現実的に困難であったため、当該地区全域を本調査することとした(第1図)。当該地区のうち新河川の築堤部については、県土木建築部との協議で調査対象から除外した。また、現河川に沿う部分についても、安全対策の観点から一定の幅を調査対象外とし作業を進めた。

調査は、調査区への進入路を確認した後に表土剥ぎを開始した。試掘調査で確認された遺構検出面までは1m以上の深さがあり、表上から遺構検出面までの間には多くの水田面がみられた。しかし、一部の面を除き調査の対象としなかった。調査区内には集落がのる微高地部分と、その北側に広がる氈地部があり、氈地部については下層水田検出のためさらなる掘り下げを行った。

調査の結果、掘立柱建物跡、井戸、土牆、溝、築石、水田跡などが確認された(第2図)。水田跡は検出が困難であったが、古代に遡る水田畦畔を確認することができた。八坂久保田遺跡を調査する時点で、県内の水田調査例はほとんどなかったが、この調査を契機にその後水田跡の調査例が増加した。

遺跡は標高が低いのに加え川が近いため出水が著しく、常時排水作業を行いながらの調査であった。雨天の後には調査区が水没することもしばしばで、調査の進捗状況に大きな影響をもたらした。平成9年9月16日の19号台風では八坂川の大洪水をひきおこし、調査区のみならず周辺の広い範囲が冠水した。八坂久保田遺跡ではプレハブや機材の流失、進入路の寸断など大きな打撃を受けた。調査区内にも大量の土砂が流入し、調査再開までに多くの時間を費やした。

調査期間は平成9年8月18日～平成10年4月20日の約8ヶ月である。この間、夏の猛暑や冷たい川風が吹く厳寒の時期など厳しい条件が続いたが、地元作業員の献身的な努力もあり調査を終了することができた。

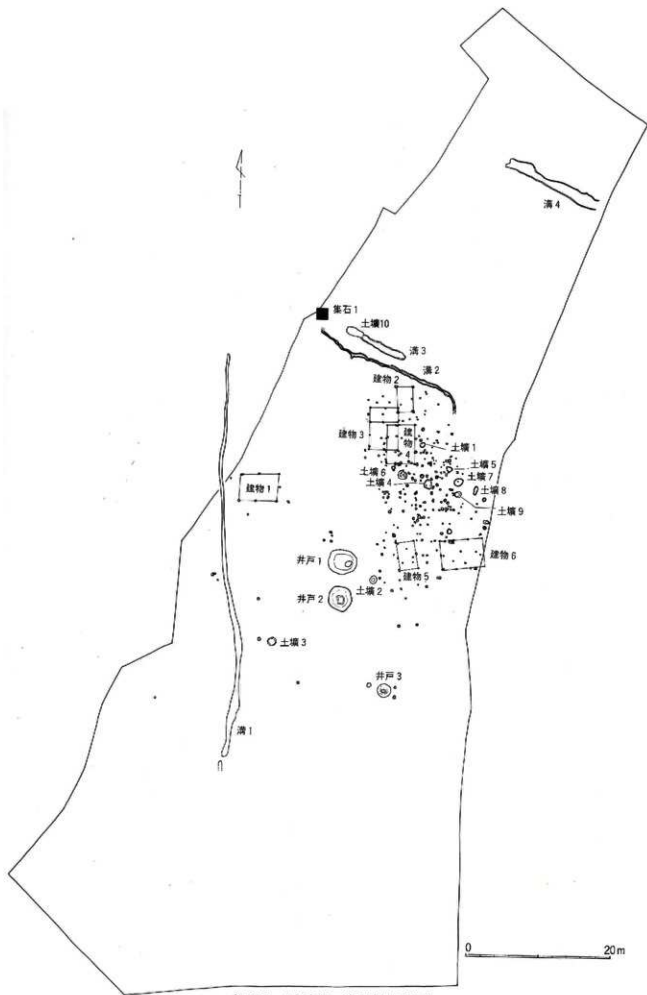
2 調査の体制

本調査時の調査体制は以下のとおりである(役職は調査時のもの)。

調査主体	大分県教育委員会	
調査指導員	別府大学名誉教授	賀川 光 夫
	別府大学教授	後藤 宗 俊
	別府大学教授	飯沼 賢 司
	立命館大学教授	高橋 亨 字
	大分短期大学助教授	佐々木 学
調査員	大分県教育庁文化課主査	後藤 一 重
	同 主査	甲斐 寿 義
	同 主任	綿貫 俊 一
	同 主任	青藤 善
	同 主事	藤内 寿 竹
	同 嘱託	萩 幸 二



第1図 八坂久保田遺跡調査区位置図



第2図 八坂久保田遺跡遺構配置図

第2章 遺構と遺物

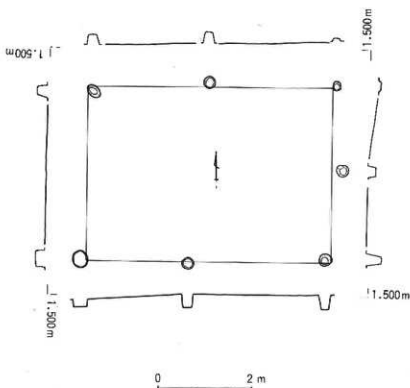
1 掘立柱建物跡

調査区内のほぼ中央部で、柱穴などの遺構が集中して検出された。このうち掘立柱建物跡として復元されたのは6棟である。いずれも南北方向あるいは東西方向に主軸をもつ。遺跡は八坂川が大きく蛇行する狭い部分に位置し、洪水被害の危険が常につきまとう集落の立地条件としては必ずしも良好なものではない。調査区中央付近から北側は低地となっており、集落は低地を臨む微高地の縁辺に立地する。

掘立柱建物跡の規模をみると(表1)、いずれも小規模である。これは、八坂川を隔てた位置にある八坂本庄遺跡の同時代のものと比べても規模が小さく、遺跡の性格を考えるのに示唆的である。

表1 八坂久保田遺跡掘立柱建物跡計測表

建物	主軸方位	梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)
建物1	N69° E	東側 1.7+1.9(北から) 西側 3.6	北側 2.6+2.5(東から) 南側 3.0+2.2(東から)	18.72
建物2	N3° E	北側 2.2 南側 2.2	東側 3.6 西側 3.6	7.92
建物3	N1° E	北側 1.8+2.1(東から) 南側 1.8+2.1(東から)	東側 1.9+2.0+1.9(北から) 西側 2.0+1.8+2.0(北から)	22.62
建物4	N0.5° W	北側 2.2+1.7(東から) 南側 2.2+1.7(東から)	東側 1.8+1.9+1.7(北から) 西側 1.8+1.8+1.7(北から)	21.06
建物5	N6° W	北側 2.7 南側 2.7	東側 1.8+2.0(北から) 西側 2.1+1.6(北から)	10.125
建物6	N65° E	東側 (4.0) 西側 2.0+2.0(北から)	北側 1.9+2.0+2.0(西から) 南側 2.0+2.0+1.9(東から)	23.6



第3図 八坂久保田遺跡建物1

(1) 建物1

建物1(第3図)は、他の掘立柱建物跡とは1棟だけ離れた位置にある。建物の周囲には、建物1を構成する柱穴を除き他の遺構はほとんどみられない。

建物は平面長方形を呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N89^{\circ}E$ で、ほぼ真東西に主軸方位をとる。

建物規模は、梁行2間、桁行2間である。京側の梁行では、中央の柱穴が梁行ラインよりもやや外側に位置する。柱穴間の距離は、南から1.9m、1.7mである。また、西側梁行については間の柱穴がみられず、柱穴間の距離は3.6mを測る。梁行については共に2間で、北側梁行の柱穴間距離は東から2.6m、2.6mで、桁行の中央に間の柱穴がみられる。南側桁行は中央の柱穴がやや西よりに位置しており、柱穴間距離は東から3.0m、2.2mを測る。

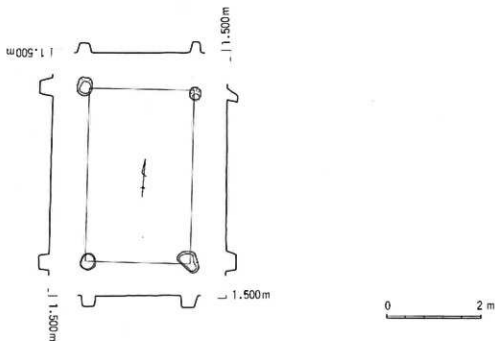
身舎面積は、18.72 m^2 を測る。本遺跡の掘立柱建物跡のなかには規模の大きな方に位置付けられるが、一般的な建物規模に比べると大きく劣る。

(2) 建物2

建物2(第4図)は、掘立柱建物跡が集中する中央部の最も北側に位置する。建物のすぐ北側には溝2が走り、北側はそのまま低地となる。

建物は平面長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N3^{\circ}E$ である。規模は梁行1間、桁行1間で、梁行柱穴間距離が南側、北側とも2.2m、桁行柱穴間距離が東側、西側とも3.6mを測る。

身舎面積は7.92 m^2 で、本遺跡のなかでも最も小規模である。



第4図 八坂久保田遺跡建物2

(3) 建物3

建物3(第5図)は、掘立柱建物跡が集中するなかでも北側に位置する。建物2、建物1とは各々一部が重複する。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N1^{\circ}E$ で、ほぼ真南北に主軸方位を

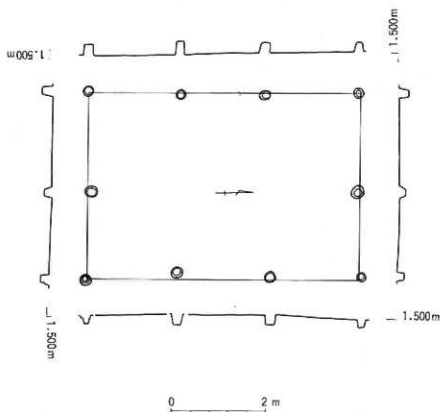
とる。

建物規模は、梁行2間、桁行3間である。梁行は南側、北側とも東から1.8m、2.1mを測る。また、桁行については東側が南から1.9m、2.0m、1.9mで、南から2番目の柱穴が桁行ラインから内側に入る。西側は、南から2.0m、1.8m、2.0mである。柱穴の掘り方こそ小さいものの、全体として整然とした柱穴配置である。

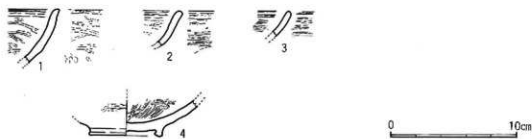
身舎面積は22.62㎡で、本遺跡の掘立柱建物跡のなかには規模の大きな方に位置付けられるが、一般的な建物規模に比べると大きく劣る。

出土遺物（第6図）は、いずれも土師器高台付き柄である。

1は暗茶褐色を呈する口縁部の破片であるが、小破片のため口径の復元にはいたらなかった。口縁部外面に強いナデが施され、端部が直立気味である。内外面にはヘラミガキがみられる。2も口縁部の破片で、乳白色を呈



第5図 八坂久保田遺跡建物3



第6図 八坂久保田遺跡建物3出土土器

する。端部はやや肥厚気味で、わずかに外反する。やはり内外面にヘラミガキが施される。3はわずかに内湾気味に端部にいたるもので、乳白色を呈する。内外面にはヘラミガキがみられる。4は底部資料である。断面四角形の比較的低い高台が付される。体部内外面にはヘラミガキが施される。以上は、12世紀初め前後に位置付けられる。

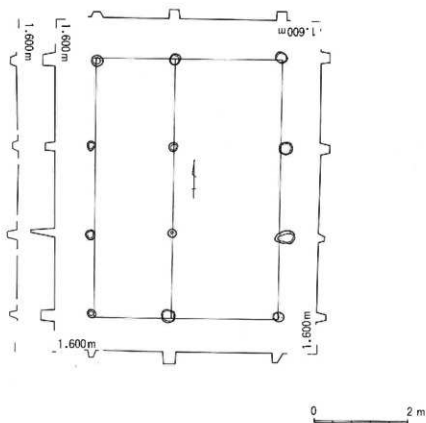
(4) 建物4

建物4(第7図)は、掘立柱建物跡が集中する地域のなかでも北側に位置する。建物3とは一部が重複する。また、建物の南側や東側に土塔1、土塔4、土塔5、土塔6などがみられる。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N0.5^{\circ}W$ で、ほぼ真南北方向に主軸方位をとる。

建物規模は、梁行2間、桁行3間である。梁行は南側、北側とも東から2.2m、1.7mを測る。梁行の柱穴配置については、南側、北側とも、中央の柱穴がやや西側によっていることが特徴としてあげられる。この両梁行中央の柱穴を結ぶように身舎中に柱穴が配される。桁行は、東側が南から1.7m、1.9m、1.8mで、西側が南から1.7m、1.8m、1.9mである。この建物4も、建物3同様に柱穴の掘り方こそ小さいものの、全体として整然とした柱穴配置である。

身舎面積は、21.06 m^2 である。



第7図 八坂久保田遺跡建物4

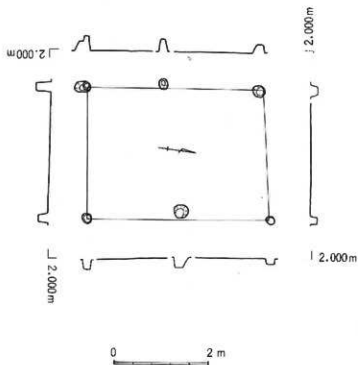
(5) 建物5

建物5(第8図)は、掘立柱建物跡が集中する地域のなかでも最も南側に位置する。東側に建物6が位置するが、建物の主軸方位や位置関係から同時存在した可能性が高い。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N6^{\circ}W$ で、建物1、建物2、建物3、建物4に比べると西への振り方が大きい。

建物規模は、梁行1間、桁行2間である。梁行は南側、北側とも2.7mを測る。また、桁行については東側が南から2.0m、1.8mで、中央の柱穴が桁行ラインから内側に入る。西側は、南から1.6m、2.1mで、中央の柱穴が桁行ラインからやや外側になる。桁行の長さが、東側と西側でわずかに異なる。建物の柱穴配置は、全体としてやや整然さを欠いた感がある。

身舎面積は10.125 m^2 で、建物2にちかい規模であることが分かる。八坂久保田遺跡では、20 m^2 クラスのものが居屋で、約10 m^2 以下のものが倉庫などといった違いがあるのかもしれない。



第8図 八坂久保田遺跡建物5

(6) 建物6

建物6(第9図)は、掘立柱建物跡が集中する地域のなかでも最も南側に位置するもので、建物の一部は調査区外に及ぶ。

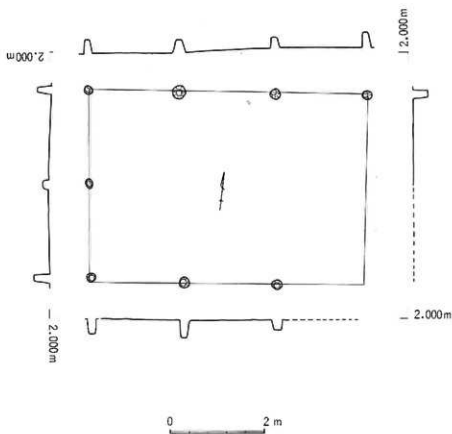
建物は平面長方形を呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N85^{\circ}E$ で、西側に位置する建物5とちかい方位を示す。

建物規模は、梁行2間、桁行3間である。梁行の柱穴間距離は、西側が南側から2.0m、2.0mを測り、東側は北側の柱穴以外が調査区外に及ぶため不明である。また、桁行の柱穴間距離は、北側が西から1.9m、2.0m、2.0m、南側が西から1.9m、2.0mで、あとは調査区外に及ぶ。柱穴の掘り方こそ小さいものの、全体として整然とした柱穴配置である。

身舎面積は推定で23.6 m^2 を測り、本遺跡のなかでは最も規模が大きなものである。

出土遺物（第10図）は、上師質土器小皿が1点のみである。

5は、南側桁行の西から3番目の柱穴から出土した完形品である。これは建物祭祀に係わるものと考えられ、意識的に柱穴内に埋納されたものであろう。しかし、出土状況の観察が十分ではないため、建物建築時のものか廃棄時のものかは判断しかねる。土器は乳白色の色調を呈し、精良粘土を使用している。口径9.4cm、器高1.4cmを測るもので、手捏ね成形である。いわゆる京都系の「て」の字状皿で、在地のものとは形態、胎土、色調などが明らかに異なる。小森俊寛、上村憲章によれば（小森俊寛、上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第3号 1996）、この種の器形は11世紀末から12世紀初にはみられなくなるという。法量的には最終段階ちかくで口径10cm以下のものが中心となるようで、法量から見れば本遺跡のものもこのような段階に位置付けられよう。



第9図 八坂久保田遺跡建物6



第10図 八坂久保田遺跡建物6出土土器

2 井戸

本遺跡からは3基の井戸が検出された。これらは、いずれも独立した建物跡などが集中する部分の南西から南にかけみられる(第2図)。このうち井戸1と井戸2は建物群に近く、互いに近接した位置にある。これに対し井戸3は、建物群からやや離れている。

(1) 井戸1

井戸1(第11図)は、長径4.2m、短径3.3mを測るやや不整形気味の楕円形を呈する。これを一旦約1m掘削り下げ、平坦面を形成する。ここまでの壁について、大部分は比較的直立気味であるが、南側についてはやや緩やかである。平面形態をみた場合、この部分のみ違和感があり、本来の壁が崩壊した可能性が高い。これを考慮にいとると、当初の平面プランはもっと整然とした楕円形であったものと推定される。

途中の平坦面は径約2.3mの円形基調を呈し、踏み固められたためか平坦面がやや硬化した部分が認められた。次に、この平坦面の南西の隅に寄った部分からさらに掘り込みが行われる。掘り込みは、一部に崩壊がみられるものの径1.4~1.6mの楕円形を呈する。約0.7mで底面に達するが、底面は平坦である。掘り込みの壁はほぼ直立するが、底面から0.3mの部分で壁がえぐれたようになる。

2段目の掘り込み内には、木組みの枠が設けられていたようである。木材が収められたためか、全体として本来の状況を留めないが、残存したもから旧状を復元できる。木組みの基本的な構造は、四隅に杭を打ちその間に板材を渡し方形の枠を作ったものである。現状で四隅の杭が旧状のまま残っているのは北東のコーナーのみで、長さ0.7~0.9mの杭が2本打ち込まれている。北西コーナーについても、同様な杭が1本だけではあるが割れた状態でみられる。コーナー間については、北側が長さ1m、幅0.3mの板材を渡しているのに対し、東側は長さ0.9m、幅0.15~0.2mの丸太を半載したものを数段にわたり積んでいる。また、各々の背後については板材を立てたり、丸太材を置くなどして補強しているようだが、統一性がなく全体として粗雑な作りである。以上から木組みの規模を復元すると、内法で一辺0.8~0.9m、深さ0.5m程度であったことが推定できる。

上層間(第12図)をみると、2段目の掘り込みがいち早く埋没している。これに対し、1段目の掘り込みについては徐々に埋没が進行していった状況が見てとれる。

井戸内からは土器、木製品など多くの遺物が出土した。特に、2段目の掘り込み内からは、曲物の一部、扁貝などの上層品のほかには桃の種子、コガネムシの羽などの自然遺物もみられた。土器の多くは1段目の埋土中から出土しており、なかには完形品もみられた。

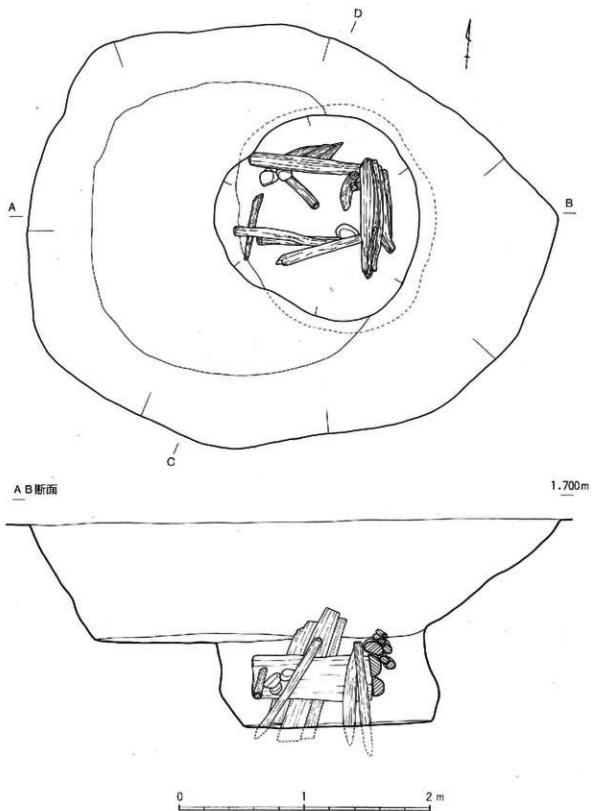
・土器

出土遺物のうち土器(第13、14図)は、土師質土器杯・小皿、土師器碗、須恵器碗、白磁、須恵器鉢、七瀬などがある。

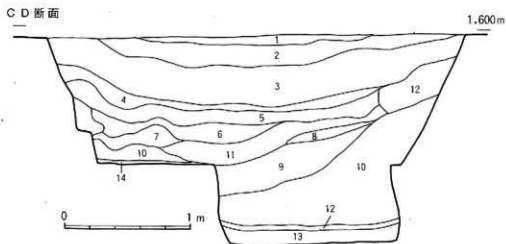
6は土師質土器杯である。小破片のため径は復元できないが、底部から体部が緩やかに立ち上がる状況が分かる。底部は回転系切りである。

7~16は土師質土器小皿である。器形などにより大きく1類(7)、2類(8、9、11、12、14、15)、3類(10、13、16)に分けられる。1類は口径に比し器高の高いものである。7は体部が方向に直線的に口径にいたり、底部は丸みをもちやや肥厚する。このような器形の小皿は、大分市上野・岩屋寺遺跡SX001黒色土からの出土例があるが、県内では稀である。2類は体部が短く、直線的あるいは内湾気味に口径にいたる。いずれも底部回転系切りで、口径は復元も含め11径8.2~9.2cmである。3類は2類に比べ器高が高いものである。いずれも口径部が外反気味であるが、10は外反が著しいなど器形的に3者3様の感もある。口径は8.5cmから10cmに及ぶ。このうち10と13は同一の胎土である。

17~31は土師器碗である。17は比較的深めのものである。口径部が短く外反し、体部は丸みをもち底部にいたる。外底面は回転系切りの痕跡を明瞭に残し、高台を貼り付ける。高台を貼り付ける際の強いナゲのため、その部分



第11圖 八坂久保田遺跡井戸1

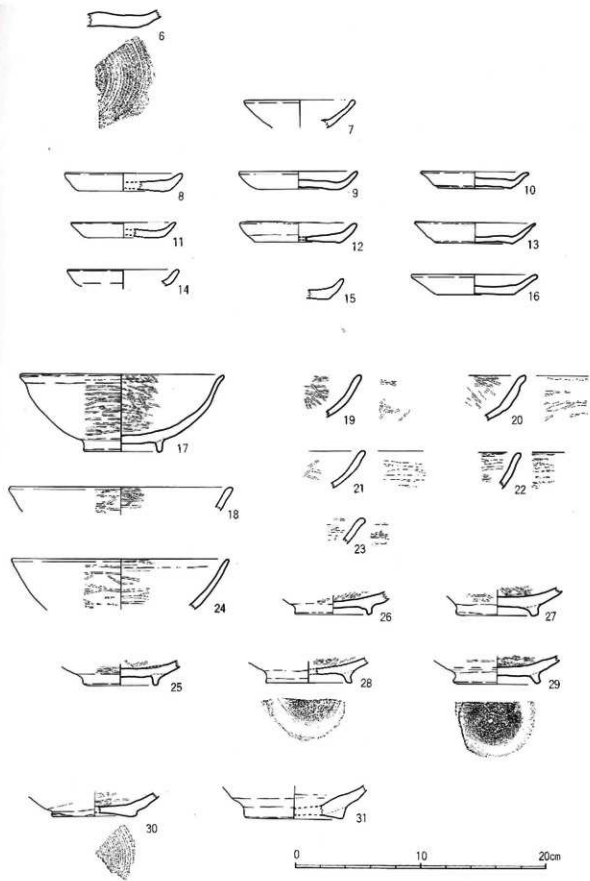


- | | | | |
|-----------|------------------------|----------------|--------------------|
| 1層 暗灰褐色土層 | 黒色、黄色の粒子多く下面に鉄分、マンガン沈殿 | 8層 砂まじりの青灰色粘土層 | 炭化物や鉄分を若干含む |
| 2層 暗黄褐色土層 | 炭化物が若干、黒色、黄色粒子多い | 9層 暗灰色粘土層 | 黄色ブロック、鉄分、炭化物含む、粘質 |
| 3層 灰褐色土層 | 炭化物が若干、黒色黄色粒子、やや粘質 | 10層 暗灰色粘土層 | 黄色ブロック多い、強い粘質 |
| 4層 鉄分沈降層 | 周辺部は灰色粘土多い | 11層 黒灰色粘土層 | 木片を多く含む、強い粘質 |
| 5層 黄灰色土層 | 黄色ブロックを若干含む、やや粘質 | 12層 黄赤土層 | |
| 6層 青灰色粘土層 | しまりがなく、やや粘質 | 13層 暗灰色粘土層 | |
| 7層 暗灰色粘土層 | 青灰色粘土ブロックや木片を含む | 14層 赤褐色土層 | 粘土ブロック含む |

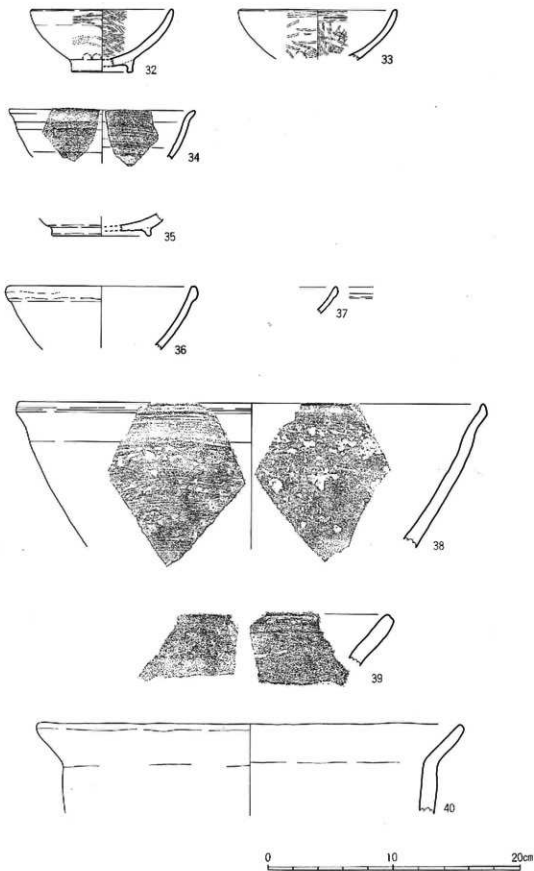
第12図 八坂久保田遺跡井戸1土層図

のみ糸切り痕が消えている。高台はやや高めのものが直立気味に付く。体部内外面には丁寧なヘラミガキが施される。18はI線部がわずかに外反気味で、端部は丸く肥厚する。体部は内外面ともヘラミガキがみられる。24、25は同一固体の可能性をもつ。I線部付近はナデがはいり、わずかに外反傾向をもつ。体部には内外面にヘラミガキが施される。低部は高台が直立気味に付されるが、17に比べるとやや低い。外底面には糸切り痕が明瞭にみられ、高台貼り付けの際のナデにより高台周辺のみはそれが消されている。19-23は口縁部資料である。いずれも端部が丸みをもち、外反基調である。なかには、20のように顕著に外反するものもある。また、体部は内外面ともヘラミガキである。26-31は底部資料である。高台はいずれも断面方形で、17に比べるとやや低めの感がある。26は直立気味であるが、27-29は外開き気味に付されている。また、外底面には糸切り痕が残り、内外面にはヘラミガキが施される。以上の土器高台付き碗を考える時に、西瀬戸内に分布する防長型土器器輪との関係をみてみる。防長型土器器輪は、乳白色系の色調を呈し、外底面には糸切り痕が残る。また、体部内外面にはヘラミガキが施される。井口1出土のうち、17、25-29の底部にはいずれも明瞭に糸切り痕が残る。高台を貼り付けるにあたり、低部を押し出すことなく高台を付けていることが分かる。また、色調についても27、29は乳白色を呈し、その他についても赤色系統のものはほとんどない。体部の調整も体部内外面にヘラミガキが施される。古代以来の伝統的な赤色系統のものがみられないという点と、低部の非押し出し技法などは防長型土器器輪と共通する特徴である。したがって、これらも広い意味での防長型土器器輪として捉えられるのではなかろうか。30、31は輪高台ではなく、口盤状高台のような形態をなす。30は底部に同軸糸切り痕がみられ、内底面にはヘラミガキが施される。

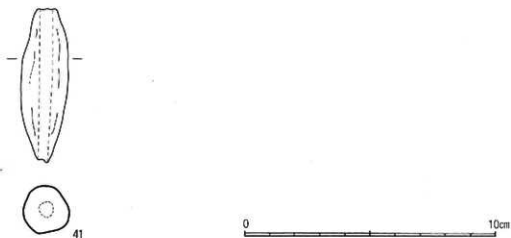
32、33は土器の小碗と思われる。口径はいずれも12cm内外で、通常の碗と比べると明らかに小振りである。32は復元品であるが、全体の器形が分かる好資料である。やや厚めで、口縁部に向かい内湾気味になる。体部下半は丸みをもたず、すぼまる感じでそのまま底部にいたる。高台は断面方形で、直立して付される。高台の高さ



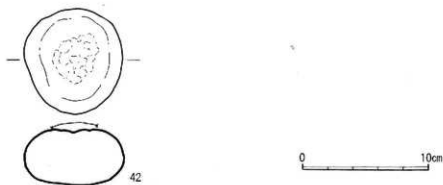
第13図 八坂久保田遺跡井戸1出土土器(1)



第14回 八坂久保田遺跡井戸1出土土器(2)



第15図 八坂久保田遺跡井戸1出土土製品



第16図 八坂久保田遺跡井戸1出土石器

は、全体の大きさに比すると高めである。体部内外面にていねいなヘラミガキが施されるが、外面は内面に比べ粗な感じである。33は底部を欠くが、32と同様な器形を呈する。やはり体部内外面にヘラミガキが施される。両者の色調は、灰色系統を呈し、明らかに在地産のものとは異なる。また、底部の処理についても押し出しが確認でき、いわゆる防長系土師器に特有な非押し出しではない。これらのことから、32、33は吉備系土師器の範疇で考えられるものと思われる。時期的には12世紀初頭前後のものか。

34は須恵器碗で、口縁部がわずかに外反する。破片資料のため断定はできないが、東播系の製品である可能性が高い。

35は内黒土器椀の底部である。高台はやや低めで、直立気味に付く。内面にはヘラミガキが施されているようであるが、磨減が著しく詳細は不詳である。

36、37は白磁碗である。両者とも口縁部外面が下縁状をなすものであるが、37の方が36に比べ玉縁が小さく振られている。

38は須恵器こね鉢である。復元口径36.8cmを呈するもので、口縁下で屈曲し端部を上方につまみ上げる。調整は内外面ともヨコナデである。本品は形態的にみて、香川県「瓶山窯産のものである可能性をもつ。十瓶山窯産こね鉢については「片桐孝浩「讃岐国十瓶山窯産製品の流通について」『中近世土器の基礎研究』1992)、窪窯産こね鉢が衰退しはじめる頃から、東播系のこね鉢が隆盛になるまでの間生産されており、時期が下るにつれ口縁端部の屈曲が小さくなるという。38は形態的にみて、12世紀代にはいるものであろう。

39、40は土鍋で、いずれも口縁部が外方にくの字状に折れるものである。39は口縁部だけの資料であるが、40

をみると胴部は張らず、そのまま丸底の底部にいたるものと推定される。胴部外面には縦方向のハケメが施される。

以上の土器群は、全体として11世紀末～12世紀初の時期に比定される。

・土製品

土製品としては、土師が1本出土した(第15図)。41は紡錘形を呈するもので、長軸線上に径0.5cmの孔がとおる。長さは6cm強を測るもので、比較的大型の製品である。

・石器

石器は散石が1点出土した(第16図)。42は円礫を利用したもので、片面に敲打痕が残る。

・木製品

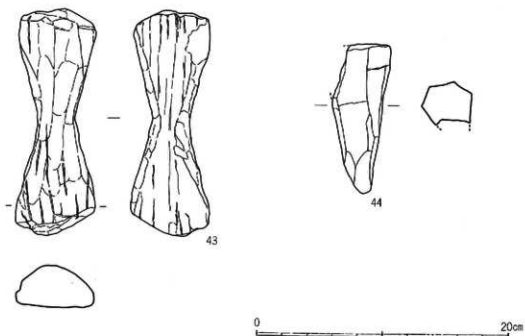
木製品として編具、杭などがみられる(第17、18図)。

43は依編みなどに使用する編具と思われる。当地方においても近年まで依編みを行う時に、ツツ口と称される同様な形状をしたものを使っていたようである。よって、時間的に大きな隔たりはあるものの、本品もその形状から依編みの際利用されたものと考えた。全長17.8cm、最大幅6.2cmを測るもので、断面は片面が弧状で、片面が平らになっている。丸太を縦に半截したものを加工して製作したものであろう。小刀状の工具を使い表面を削り、中央部がくびれるように仕上げている。

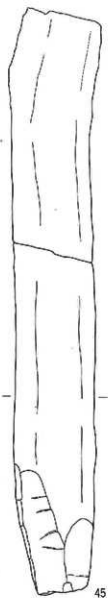
44は杭先と思われるが、意識的に先の部分だけ切断している。

45は杭である。径8～9cmの丸太材を利用したもので、丸太材は真直くではなく、やや屈曲している。先端部のみ鉋状の工具を用い、粗い加工で尖らせている。しかし、鋭利に尖らせたものではなく、先端に平坦な面を残している。

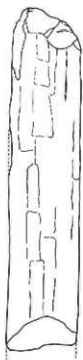
46は一部欠損するが同一品と思われる。45と同様な杭で、やはり径8cmほどの丸太材を利用している。先端部は鉋状の工具を使い粗い加工で尖らせる。また、基部についても同様な加工が施されており、尖らせたものか。



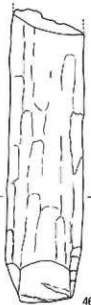
第17図 八坂久保田遺跡井戸1出土木製品(1)



45



46



0 20cm

第18図 八坂久保田遺跡井戸1出土木製品(2)

(2) 井戸2

井戸2(第19図)は、井戸1の南側に隣接するように位置する。

井戸は平面プラン円形を呈するもので、その径は約3.3mを測る。井戸1同様に2段掘りである。1段目は、まず上から0.3m程を斜方向に下げ、その後さらに約0.4mを垂直に下げる。1段目の床は径約2.4mのはば円形に整えられ、床面は平坦に仕上げられる。

2段目は、1段目の床面中央からやや東に寄った位置に掘り込まれる。2段目の平面プランは楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.2mを測る。掘り込みの壁はほぼ垂直に立ち、1段目の床面から約0.4mで底面に達する。底面は平面プラン楕円形を呈し、やはり平坦に仕上げられる。2段目の掘り込み内からは、かなり浮いた状態で丸太材1本と小木片の出土があったが、井戸1のような木組みの痕跡は確認できなかった。よって、井戸2には木組みの枠が設けられていなかったと思われ、仮に木組みがあったとしても完全に抜き取られたものと理解される。

井戸2からは土器、木製品などが出土したが、土器の多くは1段目の埋土内から出土した。また、木製品は2段目からの出土である。

・土器

土器(第20図)は、土師質土器、土師器碗、瓦器碗、内黒土器、土鍋などがみられる。

47は土師質土器である。底部のみの資料で、底部から体部が緩やかに立ち上がる様が見てとれる。底部は回転糸切りである。

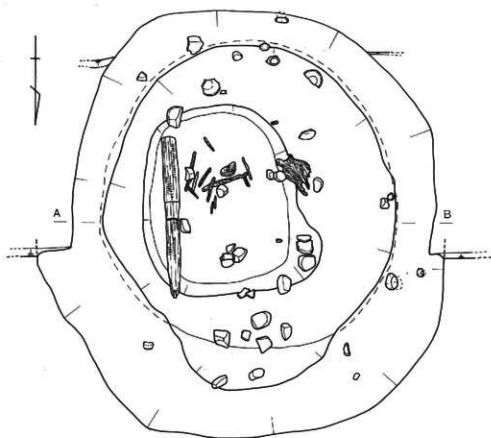
48は土師質土器小皿である。復元口径9.2cm、器高1.25cmを測る。体部はH底部から緩やかに立ち上がり、その後反しながら口縁部にいたる。

49は土師器碗である。49は底部を欠く資料である。色調は淡褐色を呈し、胎土に金ウモンが含まれる。口縁端部は丸くおさめ、内外面にはヘラミガキがみられる。50は復元口径16cmを測る口縁部である。口縁は外反し、端部はやや肥厚し丸くおさめる。色調は乳白色を呈し、内外面にはヘラミガキがみられる。50は底部を欠くため定かでない部分もあるが、色調などから防長系土師器碗との強い関係が考えられる。山口県で出土している資料にも、50のように口縁部が丸みをもち外反するものがみられる。51は口縁部資料であるが、小破片のため1径の復元はできない。器形的には50と同様に口縁部が外反する。色調は白色を呈し、内外面にはヘラミガキが施される。52はやはり口縁部のみの資料である。口径の復元はできない。形態、色調、調整などから49と同一個体である可能性が考えられる。53は底部の資料である。断面方形のやや高めの高台が、直立気味に付される。外底面に糸切り痕はみられず、ナデが認められるのみである。体部外面にはヘラミガキが残るが、内面は洗い過ぎのため不明である。

54は瓦器碗である。本品は完形品で、口径15.4cm、器高5.3cm、底径5.5cmを測る。高台はやや低めで断面方形を呈し、ほぼ直立気味に付される。外底面はナデがみられる。体部は器壁が厚いが、下半があまり張らず、そのまま口縁部にいたる。しかし、口縁部ちかくで内側にわずかに屈曲する。口縁端部は丸みをもち、端部内面に沈線が施される。体部のヘラミガキは外面が高台ちかくまでみられ、内面も丁寧に施される。また、見込み部にもジグザグに施される。この瓦器碗は、その特徴から畿内の楠葉型瓦器碗と思われる。この楠葉型瓦器碗は、畿内ではそれほど広い供給範囲をもたないが、近年九州などでも出土することが知られるようになっている。外面のヘラミガキが比較的密で、高子付近までみられることから、時期的には11世紀末と考えられる。55は畿内の和泉型瓦器碗である。内外面にヘラミガキがみられ、外面口縁下にはやや幅の広い強いナデがみられる。高台は外周にしっかりとものが付き、口径に比し高台径が大きい。54と同様な時期に比定される。

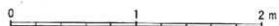
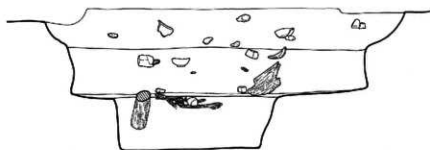
56は土鍋である。口縁部はくの字状に外方に折れるが、胴部に比して短い印象を受ける。胴部はまったく張らず、すはまるように底部にむかう。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメとナデ、内面が斜方向のナデである。

以上の土器群は、井戸1同様に11世紀末-12世紀初に位置付けられよう。

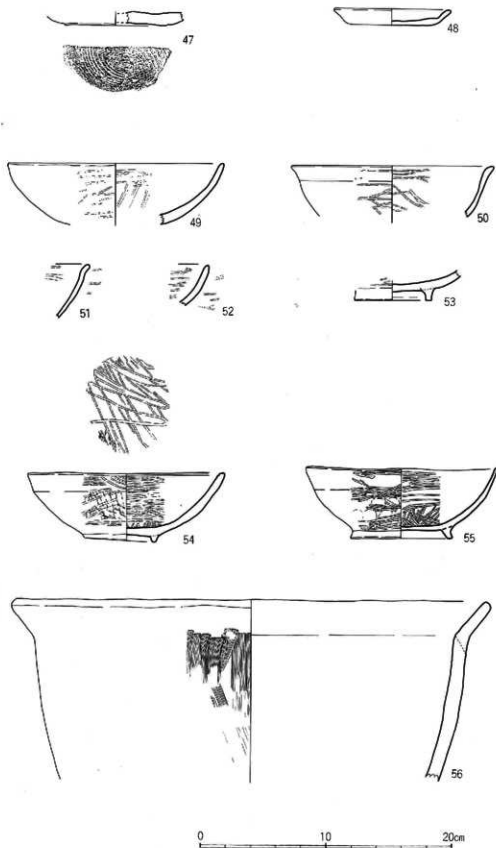


A B 断面

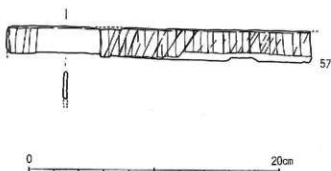
1.600m



第19圖 八坂久保田遺跡井戸2



第20図 八坂久保田遺跡井戸2出土土器



第21図 八坂久保田遺跡井戸2出土木製品

・木製品

木製品(第21図)としては、曲物と思われるものが出上した。57は曲物副板の一部である。縦方向及び斜方向の切り込みがみられる。

(3) 井戸3

井戸3(第22図)は、井戸2の南東約12mに位置する。

井戸1や井戸2に比べると規模が小さいものである。平面プランは円形基調をなし、径は約1.7mである。全体としては2段掘りで、1段目は検山面から0.55mまで掘り下げる。1段目の壁はかなり斜めになっており、一部にテラス状を呈する部分もある。1段目の床は比較的狭く、0.5×0.7mの楕円形をなす。

2段目は1段目の床の裏に寄った部分に掘り込まれる。2段目の平面プランは、径約0.5mの不整形円形を呈する。2段目は、1段目の床から約0.15mで底面に達し、底面は一边0.4mの方形基調をなす。2段目の壁は1段目に比べると垂直にちかく、底面は平坦である。

上層をみると、東側からの土砂の流入により埋没していった様子が分かる。また、これから本井戸が顕著な掘り直しもされていないことが見てとれる。

井戸3からの出土遺物はほとんどなく、若干の土器片が検出されたのみである。

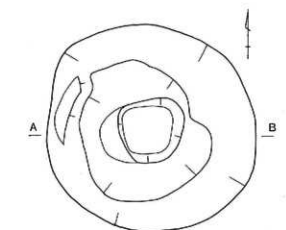
本井戸の特徴として、①土掘りで井戸枠をもたない、②いわゆる井戸としては浅めである、③2段掘である、④建物群からはやや離れた位置にある、などをあげることができる。このような形態を有する井戸は、近年いくつかの遺跡で確認されている。これらの遺跡検出の井戸は、水が十分に自噴せず、雨水や水田の余り水を蓄える機能を併せもつ農業用井戸と推定される(後藤一重「農業用井戸」について—農業用灌漑施設の一例—『遺跡探検』安波町教委 2001)。井戸3についても同様な機能をもつものであろう。前述した井戸1、井戸2についても同じような性格を有するものと考えられる。

・土器

土器(第23図)は、土師器碗がある。

58は土師器碗の底部である。円盤状高台を呈するもので、底部はほぼ完形である。体の底部からの立ち上がりは比較的緩やかで、体部下半が膨らみをもつ器形であることが想定される。また、内底面はやや凹み気味である。底部は同軸糸切りで、その痕跡が明瞭に残る。体部は全体的に磨滅が著しいが、内外面ともヘラミガキが施されていたようである。

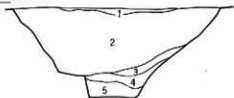
土器の時期は11世紀末から12世紀初に位置付けられる。



A B 断面 1.500m



A B 断面土層図 1.500m



- 1層 暗褐色土層
マンガン、鉄分を多く含む
- 2層 暗赤褐色土層
灰色ブロック含む
- 3層 灰褐色土層
若干の炭化物、やや粘質
- 4層 灰黄褐色土層
若干の炭化物、やや粘質
- 5層 灰色土層
若干の炭化物、やや粘質

第22図 八坂久保田遺跡井戸3



0 10cm

第23図 八坂久保田遺跡井戸3出土土器

3 土 壙

建物群の周辺を中心に土壙が検出された。以下、主要なものについて述べる。

(1) 土 壙 1

土壙1（第24図）は、建物4のすぐ東側に位置する。

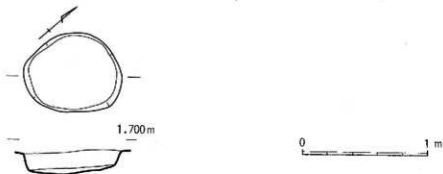
土壙の平面プランは不整形円形を呈し、その規模は長径0.8m、短径0.6mを測る。床面まではそれほど深くなく、0.1~0.2mである。床面はやや凹凸を有する。

土壙内からは土器片が若干出土したのみである。

・土 器

土器（第25図）は、土師器碗である。

59は体部下半以下を欠くもので、復元径15.6cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。体部内外面にはヘラミガキが施される。60は口縁端部をわずかに外反させる。調査は、外面がヨコナデヤナデ、内面が丁家なヘラミガキである。時期は12世紀初前後に位置付けられる。



第24図 八坂久保田遺跡土壙1



第25図 八坂久保田遺跡土壙1出土土器

(2) 土 壙 2

土壙2（第26図）は、他の土壙と離れた位置にある。他の土壙が建物群の中や東側にみられるのに対し、土壙2は建物群南側の井戸1や井戸2に近い場所に位置する。

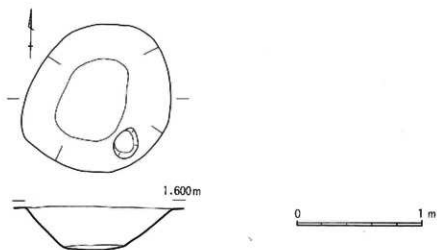
土壙の平面プランは不整形円形を呈し、径約1.2mを測る。検出面から床面までの深さは0.35mを測り、床面は長径0.65m、短径0.5mの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは斜めで、上面に比し床面は狭い。

土壙からは土器片が少量出土したのみで、遺物は少ない。本遺構は土壙としたが、他の土壙とは形状がやや異なり、遺構の位置なども考え併せ農業用井戸とした方がよいかもしれない。

・土 器

土器（第27図）は、土師質土器小皿、土師器碗などがある。

61は土師質土器小皿である。復元口径9.6cmで、体部は底部から斜方向に立ち上がり、外反しながら口縁にいたる。62、63は土師器碗である。時期は12世紀初前後に位置付けられる。



第26図 八坂久保田遺跡土壇2

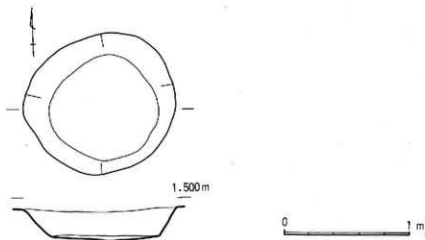


第27図 八坂久保田遺跡土壇2出土土器

(3) 土壇3

土壇3（第28図）は、井戸1、井戸2の南西部にやや離れて位置する。

土壇の平面プランは円形基調を呈し、径1.1～1.2mを測る。深さは約0.2mで、床面も約0.8mの円形をなす。



第28図 八坂久保田遺跡土壇3

床面は平坦である。

出土遺物もほとんどなく、本遺構についても土壌2と同様に、遺構の形状や位置からみて農業用井戸とした方がよいかもしれない。

・土器

土器（第29図）は、64の土師器碗が出土したのみである。時期は12世紀初前後に位置付けられる。



0 10cm

第29図 八坂久保田遺跡土壌3出土土器

(4) 土 壌 4

土壌4（第30図）は、建物群が集中する中にある。建物4の南東に位置し、周辺には土壌5、土壌7、土壌8、土壌9などがある。

土壌は不整形を呈し、長径1.3m、短径1.05mを測る。最深部までの深さは0.15mで、壁は床面から緩やかに立ち上がる。また、柱穴と重複するが土壌4との前後関係は不明である。

・土器

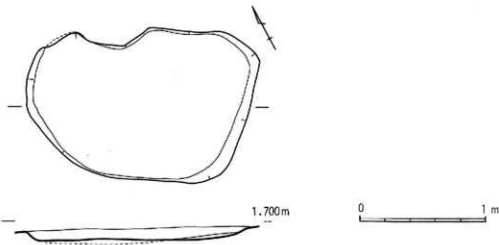
土器（第31図）は、土師質土器杯、土師器碗が出土した。

65、66は土師質土器杯である。65は復元口径16.8cm、器高3.7cm、復元底径8.4cmを測る。底部は回転糸切りの後に板状圧痕がみられる。体部は底部から斜方向に立ち上がり、直線的に口縁にいたる。体部外面にはワクロ痕が残る。口縁端部は丸くおさめる。

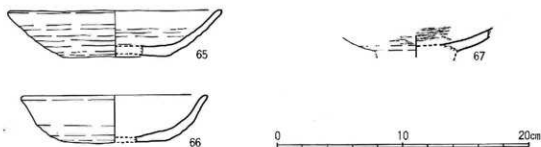
66は復元口径14.4cm、器高3.7cm、復元底径8.5cmを測る。底部は回転糸切りである。体部は底部と同じ厚みをもち、底部から一旦内湾気味に立ち上がる。その後、体部中ほどから外反気味に口縁にいたる。65とはまったく器形が異なる点が注目される。

67は上半及び底部を欠くが、土師器の高付き椀と考えられる。乳白色の色調を呈し、内外面にはヘラミガキがみられる。いわゆる防長系土師器として考えられるものであろう。

以上の土器の時期は、12世紀初前後に位置付けられる。



第30図 八坂久保田遺跡土壌4



第31図 八坂久保田遺跡土壌4出土土器

(5) 土 壌 5

土壌5(第32図)は、建物群が集中する中にあり、建物4の南西に位置する。付近には土壌4、土壌7、土壌8、土壌9などがある。

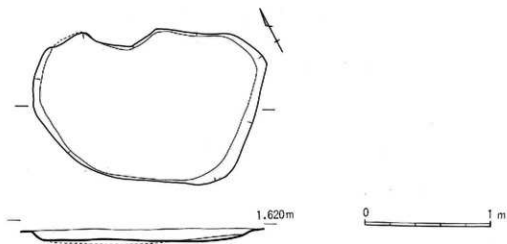
土壌は不整形を呈し、長径1.8m、短径1.2mを測る。深さは0.1mと非常に浅く、床面は全体に平坦である。壁の立ち上がりは、西側が比較的直立するのに対し、東側は緩やかに立ち上がる。また、遺構の大きさに比し遺物の量は少ない。

本遺跡では、調査区の中央に掘立柱建物跡が密集するが、それらを見ると建物群は大きく2群に分かれる。すなわち、建物2、建物3、建物4の一群、及び建物5、建物6の一群である。前者は中央建物集中地区の北端に、また後者は中央建物集中地区の南端に位置する。両者の間には、約10mほどの距離がある。ここで紹介している土壌の多くは、これらふたつの建物群の間に位置する。遺跡内の空間利用にある程度の規則性があったことをうかがわせる。

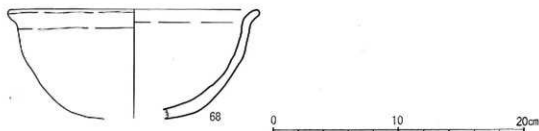
・土 器

土壌5からの出土土器(第33図)は、土鍋のみである。

68は復元口径19.6cmの比較的小型の土鍋である。口縁部は緩やかに短く反折し、胴部はあまり張らず半球形のまま底部にいたる。外面底部ちかくに、縦方向のケズリ状のものがみられるほかは、内外面ともナデ調整である。土器の時期は、12世紀初前後に位置付けられる。



第32図 八坂久保田遺跡土壌5



第33図 八坂久保田遺跡土壌5出土土器

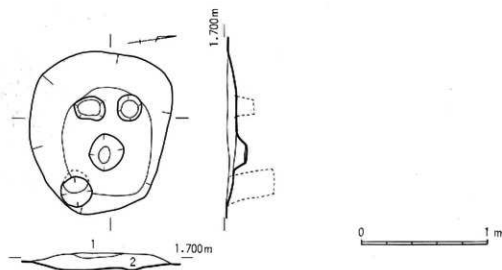
(6) 土 壌 6

土壌6(第34図)は、建物4のすぐ南側に位置する。

平面プランは不整形円形を呈し、長径1.3m、短径1.1mの規模を有する。深さは0.1m弱で、断面は緩やかに皿状を呈する。柱穴4本と重複しているが、前後関係などは不明である。

土壌の肌上には焼土や炭化物が多く含まれ、上層にはそれが顕著である。しかし、土壌内からは同示できるような良好な土器は出土しておらず、時期などは不明である。

本土壌のように、鏡上のみられる土壌が他にもある。土壌8、土壌9などである。なかには鉄滓が少量出土したものもあるが、全体として関連があるものかは定かではない。



第34図 八坂久保田遺跡土壌6

(7) 土 壌 7

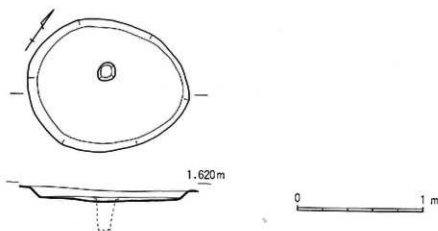
土壌7(第35図)は、建物2、建物3、建物4の一部、及び建物5、建物6の一部の間に広がる土壌群の中に位置する。

土壌の平面プランは楕円形で、長径1.3m、短径1.05mの規模を有する。深さは約0.1mで、壁の立ち上がりは

比較的シャープである。

土壌の中央近くには柱穴がみられるが、本土壌に伴うものであるかは定かではない。

上層からは、図示できるような遺物は出土していない。



第35図 八坂久保田遺跡土壌7

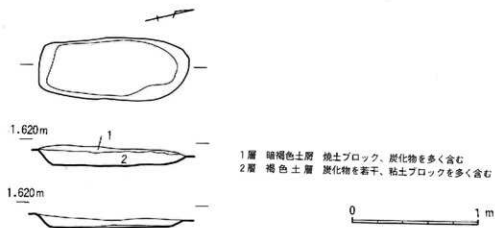
(8) 土 壌 8

土壌8（第36図）は、土壌7などと同じ、建物群の間の土壌密集地に位置する。

土壌の平面プランは、隅丸長方形のような形を呈する。その規模は長辺1.2m、短辺0.45mを測る。深さは0.1m内外である。

上層は暗褐色土層で焼上ブロックや炭化物を多く含み、下層は炭化物を若干含むのみである。焼上の入り方から、ここで焼いたという感じではなく、焼土層を廃棄したものであると思われる。

土壌からは、図示できるような遺物は検出されていない。



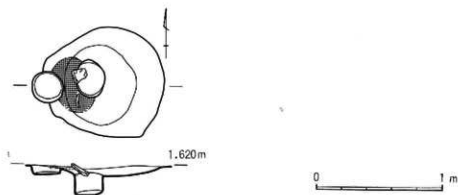
第36図 八坂久保田遺跡土壌8

(9) 土 塙 9

土塙9(第37回)も、建物2、建物3、建物4の一群、及び建物5、建物6の一群の間に広がる土塙群の中に位置する。

土塙の平面プランは不整形形で、径約1.0mを測る。深さは0.1m程で、断面皿状を呈する。2本柱穴と重複するが、柱穴から切られている。焼上は、ほぼ床面で検出された。焼上の広がりは、柱穴により切られるが径約0.4m程である。

本土塙は、焼土が検出された土塙6、土塙8などと比べると、焼土が床面にある点が異なる。土塙内からは、鉄滓が数個出しており、その状況から鍛冶炉の残影とも考えることができる。



第37回 八坂久保田遺跡土塙9

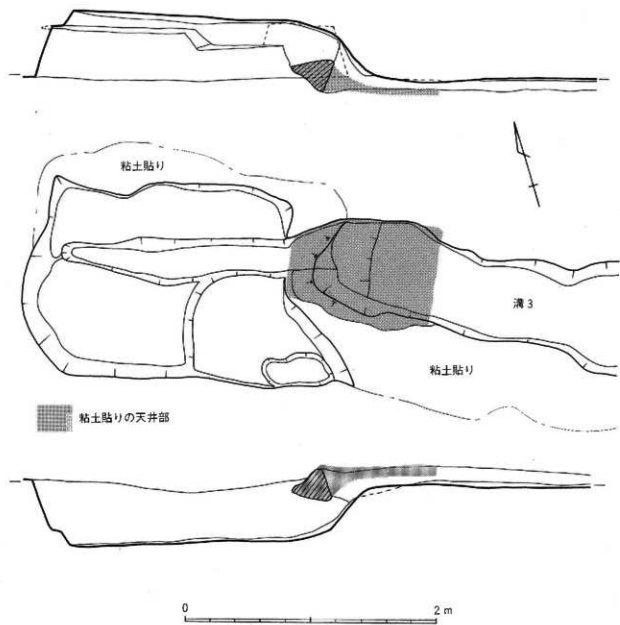
(10) 土 塙 10

土塙10(第38回)は、掘立柱建物群が集中する調査区中央の北側に位置する。建物群の北側は、溝2を境に低地に移行する。土塙10の場所は、ちょうど微高地から低地に移った位置にあっており、溝3が土塙10と連絡する状態にある。現状で土塙10の西側には溝3が延びず、この状態をそのまま解釈すれば、土塙10から溝3が始まることになる。

土塙10の平面プランは、長方形基調を呈する。規模は長辺約1.9m、短辺1.6mを測る。床面までは検出面から0.4mで、壁は比較的直立して立つ。床面のうち、南東の一角は方形にやや高く。また、土塙の中央には溝3から延びるように、溝状のものが東西にみられる。溝状のものは、幅0.15~0.25m、床面からの約0.1mで、東から西に向かいわずかに傾斜している。また、土塙のほぼ北半分については、地山を切り込むのではなく、粘土を貼り壁が形成される。

溝3との連絡部分については、溝が土塙の東辺北寄りの部分に取り付く。溝の床面レベルはほとんど変化しないが、土塙に近づきわずかに下がる。連絡部の上には、粘土を用い天井をかける。この天井は、連絡部からさらに溝の方へ向かい約0.8mにわたってみられる。溝の部分では、天井と床面の間隙が0.1mと、非常に狭くなっている。また、天井部は土塙の上になると厚さ0.2mを測り、溝部分の天井の厚さに比べると倍ちかくなる。溝の南側では、土塙の北側でみられたように粘土が貼られ、壁が形成されている。

以上のように、土塙10は溝3と深い関係があるというよりも、溝3と一体となってその機能を果たすように作られている。天井施設が何を目的としたものか定かではないが、特異な施設であることは明らかである。加えて、粘土を貼って壁を形成するなどかなり手をかけた作りである。いずれにしても、水田灌漑に関連する施設であろう。



第38図 八坂久保田遺跡土壇10と溝3

4 集石

集石遺構は、1基確認されたのみである。

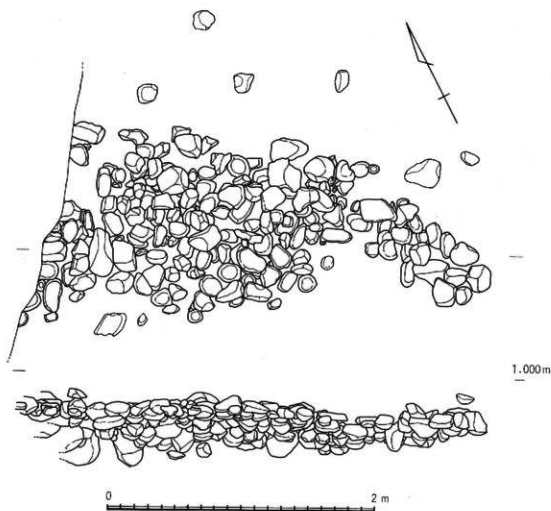
(1) 集石1

集石1(第39図)は、土壇10や溝3の西側に位置し、一部は調査区外に及ぶ。

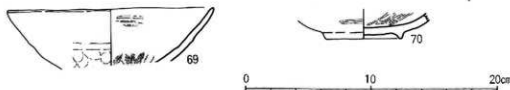
集石のある場所は、建物群が展開する調査区中央の微高地が低地に移った部分である。低地部には水田が展開しており、何処にもわたり水田層が堆積している。水田は、主に集石1や溝3よりも北側に広がりをみせており、集石1は水田の縁辺に位置することになる。

集石は一部が調査区外に及ぶため全体の規模は不明であるが、東西に長く延びる感じで展開する。その規模は、羽状で東西約3.5m、南北約1.5mである。

使用されている石は0.1~0.4mのもので、主として川原石である。なかで多いのが、0.2~0.3m程のもので、概してやや大きめの石材を使用している。集石の周囲には明確な滞り込みはみられず、土壇などの遺構に伴うものでないことが分かる。集石の中央が高くなることから、遺構内に放り込まれたというよりも、むしろ積み上げられたという印象をもつ。また、石材を細かく観察したが焼成を受けた痕跡などはまったく認められず、集石の性格を考えるのに示唆的である。



第39図 八坂久保田遺跡集石1



第40図 八坂久保田遺跡集石1出土土器

集石の高さは、最も高いところで約0.5mに達する。大きめの石が下にある傾向が見てとれるが、積み上げ方や石材の使用方法に明確な法則性や規則性はまったく認められない。むしろ、かなり無造作に積み上げた印象もたれる。また、集石のなかからは若干の上器片などが出土したが、意識的に遺物を入れたりしたという状況ではない。

石をすべて除去すると、集石の下から木材が検出された。長さ1mを超えるものもあり、何らかの木組み遺構かとも思われた。しかし、杭など明らかに人為的な加工が加わったものもあったが、大部分はまったく加工がなされていない流木であった。加えて、その出土状況を観察すると、意識的に流木などを組み上げた状況は読み取りにくく、この場所に何らかの木組み施設はなかったものと判断した。

集石のある場所は、前述したように微高地のすぐ下である。また、石の広がりを見ると、微高地に沿うように東西方向に長く延びる。加えて、集石が何らかの掘り込みに伴うものでもなく、その下層に何らかの遺構もない。よって本集石は、低地に展開する水田の縁辺である微高地下に、周囲から積み上げられたものと理解される。この場合、石の片付けなどを目的としたもので、結果的に集石となったものであると推定され、何らかの用途、目的をもちここに石を積んだものではないであろう。

・土器

集石出土の土器（第40図）には、瓦器碗と土師器碗がある。

69は集石中から出土した瓦器碗である。復元1径16.2cm、復元底径5.8cm、器高5.3cmを測る。高台は断面三角形の非常に低いものが付される。外底面はあまり押し出されておらず、糸切りの痕跡が残る。体部はあまり張らず、底面から直線的に口縁部にいたる。外面下半はユビオサエヤナデが認められるが、上半は磨減が著しい。また、内面にはヘラミガキが残る。時代的には13世紀に位置付けられる。よって、集石1もこの時期の所産と考えられよう。

70は、集石下層の流木などと共に出土した。土師器碗の底部で、黄白色の色調を呈する。高台は断面三角形であり高くなく、外底面には糸切り痕が残る。体部内外面及び内底面にはヘラミガキがみられる。時代的には、12世紀中頃から後半に位置付けられる。

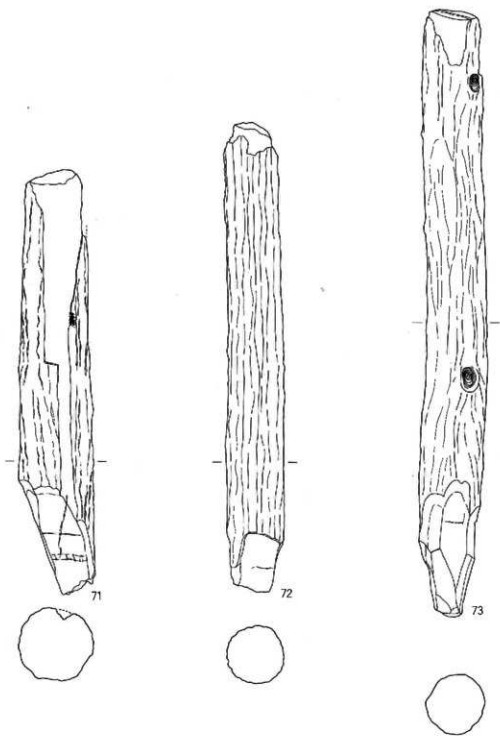
・木製品

出土木製品（第41図）は杭で、いずれも集石の下層から出土した。

71は、全長約44cmを測るものである。径7～8cmの丸太材を利用したもので、一部を除き大部分に表皮が残る。杭先は鉋状の工具により、大形に加工されている。樹種はクスギと思われる。

72は、やはりクスギを利用した杭で、全長約50cmを測る。径6cmほどの丸太材を利用したもので、ほぼ全面に表皮が残る。先端部の加工が加わった部分は短く、粗い加工である。

73は、全長約64cmを測る。やはり径約6cmの丸太材を利用しており、いくつか節も残る。樹種はクスギで、ほぼ全面に表皮が残る。杭先は、鉋状工具により大形な加工がなされている。



0 20cm

第41圖 八坂久保田遺跡集石1下層出土木製品

4 溝

調査区内から4条の溝が検出された。

(1) 溝1

溝1(第2図)は、柱穴や土壁などを検出した面よりも上層で確認された。調査区中央西側を南北方向に走り、調査区外に及ぶ。

調査区内には、現在コンクリートの水路が走っている。これは、基本的に素掘りであった水路を近年改修したものである。改修前の素掘り水路が、いつの時点で掘られたものかは明らかにできなかった。この水路の方向は、大局的にみれば、現在八坂川右岸に展開する日野・中条里の条里線にのるものである。八坂川の左岸にも、かつては同様な方向で広く展開していたが、戦前に区画整理が行われ大部分は失われている。一部に条里水田が残るが、条里方向は対岸の日野・中条里の条里線と同じものである。

溝1は、現在コンクリートに改修された素掘り水路の下層から検出された。素掘りの溝で、基本的に現在の水路とはほぼ同位置を走る。良好な遺物の出土はなかったが、埋没したのは近世～近代にかけてと推定される。幅は0.5mから1.3mで、ほぼ直線的にのびる。方位は真北方向で、日野・中条里の条里線であるMN17°Wとやや異なる。前述したように本調査区のある位置は、日野・中条里の下流側の縁辺にあたり、現在残る地割も方位がややずれている。これは縁辺に位置するために生じたことと思われ、全体の地割などをみた場合、調査区内にあるコンクリート水路までは条里地割が及んでいると考えられる。よって、溝1から現在の水路へと条里地割が引き継がれたことがわかる。

溝1を調査した後、調査区全体の掘り下げを行った。しかし、溝1の下から溝は検出されなかった。このことから、調査区周辺の現在みる地割が成立したのは、溝1築造以後であることが分かる。溝1の築造年代を考古学的に押さえることができなかったが、層位的に考えれば、少なくとも本遺跡の建物群の時期よりは後であることは明確である。日野・中条里全体の施工年代を、末端に位置する当道路内だけの状況で判断することはできないが、調査区周辺における地割については溝1築造時に成立したものとと思われる。その場合、それ以前にどのような地割があったかは定かにはできなかった。

(2) 溝2

溝2(第42図)は、掘立柱建物などが集中する地区の北側に位置する。ここは、建物群が展開する微高地の端にあたり、溝2を境に北側の低地へと下がり始める。

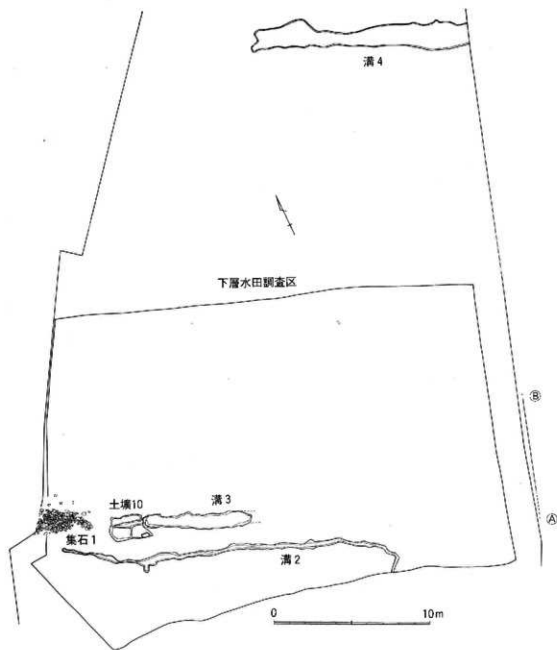
溝の幅は0.1mから0.5mを測るが、大部分は0.2m程の比較的幅の狭いものである。基本的に微高地の端に地形に沿うように走るが、全体として直線性に欠け、細かく蛇行する。基本的に南東方向から北西方向に延び、南東部ではほぼ直角に折れ南へ走る。また、北西部は微高地が低地へ落ちる周辺で切れており、溝の末端が低地へ向かいどのようなようになるのかは不明である。

溝の底面のレベルをみると、東南の端が北西の端より0.2cmほど高く、水の流れば東南から北西である。溝と低地との関係が明らかになっていないが、この状況を考えて溝は低地へ向かっていと推定される。

溝からは土器などの遺物が出土しておらず、時期は不明である。よって、溝と建物群の併行関係は明らかではない。しかし、溝の性格としては、南東方向から低地へ水を落とす役割をもつものと推定される。その場合、建物群と時期的に併行すれば、建物群の周回の排水を主とした溝と考えられる。また、建物群が存在しないとすれば、水田に伴う溝であろう。

(3) 溝3

溝3(第42図)は、溝2の北側に位置する。溝2が微高地にあつたのに対し、溝3は微高地下の低地を走る。

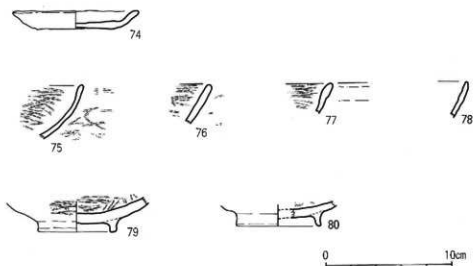


第42図 八坂久保田遺跡溝2、溝3、溝4周辺

溝の幅は、0.65mから1.1mを測る。微高地直下を、低地に沿い南東方向から北西方向に向かう。南東側は途切れるが、溝東側の土層をみると（第44図）溝が確認され、ほぼ直線的に続いていたことが分かる。

溝の北西は土壌10とつながっており、溝3と土壌10は一連の施設と思われる。溝の底面のレベルをみると、南東が北西より約0.1m高く、南東から北西に向かい水が流れたことが分かる。よって、溝3を流れる水が土壌10に溜まっていたのであろう。溝と土壌との連結部は、土壌10の項で詳述したように、粘土で天井を作っておりやや複雑な形状をなす。

土壌10の周囲も粘土を貼り壁を形成していた部分があったが、溝3の南側についても、粘土を貼り壁を形成している。



第43図 八坂久保田遺跡溝3出土土器

溝3の役割は、微高地からの落ち際を走り、低地に展開する水田に水を供給するものであったと思われる。また、土壇10は溝3の余り水を蓄える溜め井的な機能を有していたものであろう。

・土器

溝3からの出土土器（第43図）には、土師質土器小皿、土師器碗などがある。

74は土師質土器小皿で、復元口径9.8cmを測る。底部は糸切り後板状砥痕で、底部から体部が丸みをもち立ち上がり、中ほどから外反しながら口縁にいたる。

75～80は土師器碗である。75は口縁部資料であるが、小破片のため口径の復元はできない。口縁部ちかくでわずかに外反気味に立ち、端部は丸くおさめる。内外面にはヘラミガキが施される。76も口縁部の小破片である。口縁端部は丸くおさめ、外面はヨコナア後部分的にヘラミガキ、内面は丁寧なヘラミガキである。77も口縁部の小破片で、口縁端部が肥厚しやや外反する。外面はナデ、内面はヘラミガキである。78も口縁部で、体部から直線的に口縁にいたる。79は底部で、輪高台が付される。高台は断面方形で、ほぼ直立する。外底面はナデで、糸切り痕は認められない。体部内外面にはヘラミガキが施される。80も断面方形の高台が付されるが、79に比べるとやや高い。器面が荒れて調整不明な部分が多いが、内面にヘラミガキの痕跡が認められる。

以上の時期は11世紀末～12世紀初に位置付けられる。

(4) 溝4

溝4（第42図）は、溝3の約30m北側に位置する。

溝は南東方向から北西方向に向け続くもので、幅0.7mから2.0mを測る。溝の幅が一定しないが、方向的には溝3と同様な方位をとりほぼ平行する。溝の深さは数cmで、最も深いところで約0.1mである。底面のレベルについては、やや門凸があるものの顕著な高低差はない。

以上の溝4は、溝1、溝2、溝3とは形態的にやや異なった状況を示す。溝1などが用水路としての機能を想定しうるのに対し、溝4は水路というよりも区画や排水といった性格をもつものであろうか。

溝からの出土遺物はなく時期決定の決め手に欠くが、溝3と平行することから、溝3と同様な時期になる可能性もある。

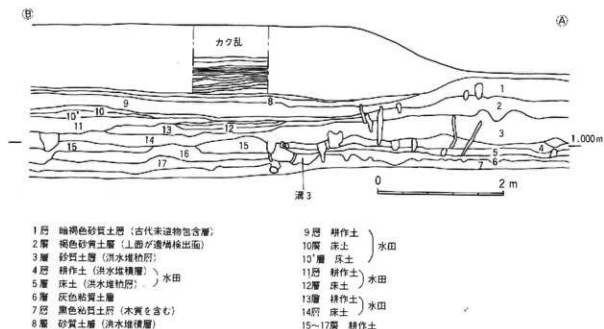
5 水田遺構

(1) 土層図から分かること

八坂久保田遺跡が位置するところは、八坂川蛇行部のなかでも最も蛇行が急な部分である。そのため、調査区は東側と西側及び北側を川に挟まれた半島状の地形をなす。東側と西側の川に挟まれた部分は、調査区中央で約100m程である。標高も低く、現況の水田面でわずかに2～3mを測るのみである。さらに、建物などの遺構検出面では1.5mと、かなりの低地であることが分かる。地下水位も高く、出水により調査の進行に大きな支障をもたらしたこともあった。

加えて、現地は八坂川の河口からあまり距離がないため、満潮時は川に潮が上がりてくる。そのため、満潮に大雨が重なると、時として大規模な洪水被害をもたらす。このように当地は、常習的に洪水被害にあっており、土地にもその歴史が刻まれている。

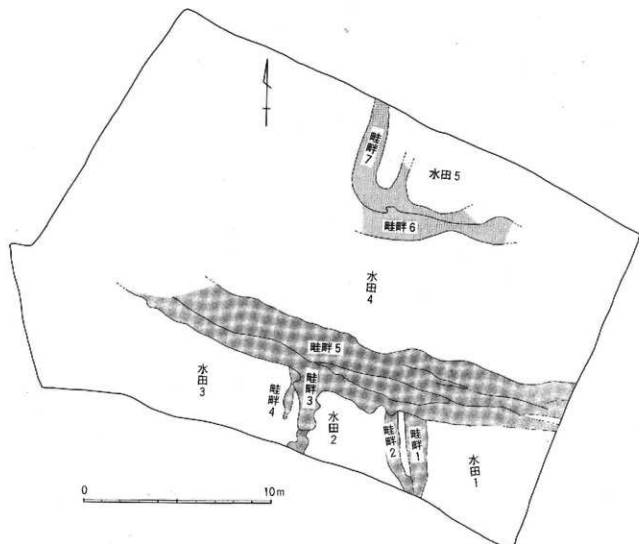
第44図は、調査区中央付近の微高地から低地に落ちる部分の土層図である。調査区を南北方向に切ったもので、何枚にも及ぶ水田層を確認することができる。最上層の約1mでは、上層の約0.5mがかく乱のため不明だが、1枚数cm程の細かな上層が多数みられる。これらは、いずれも水田に係わる上層で、耕作土と水田床土が交互に堆積する。約0.5mの厚さの中で、7枚の水田層を数えることができる。これら水田の時期はおおまかに中世以降と考えられ、現代にいたるものであろう。単純に計算すると、50～60年に1枚の割合で水田が形成されていったことになる。これらの水田は、①層厚が薄い水田層が多数重なる、②水田耕作土の色調がうすい灰色を呈するなどの特徴をもつ。①については、いずれも洪水による埋没のため、水田の作り替えが行われた結果で、大規模な洪水が歴史的に何度も発生したことを物語っている。しかし、当時の水田面を完全に覆い隠すように数十cmにもわたり洪水堆積上を残すような洪水ではなく、比較的薄い堆積しか残さなかったものであろう。すなわち、水はかぶるが、大量の土砂を運んでくるような洪水ではなかったものと考えられる。②については、その色調から



第44図 八坂久保田遺跡(A)間土層図

水田耕作土に有機質をあまり含んでないことが想定される。すなわち、耕作土に稲藁などの有機質のものがあまり働きこまれていないものと考えられ、稲藁などはことごとく持ち出され様々な活用がなされたものであろう。

上層の細かな水田層の下部は、上層とは状況を異にする層が堆積する。左半分(北側)が低地部、右半分(南側)が微高地部である。掘立柱建物群などが展開していた時には、微高地から低地への段落ちが明らかに認められるが、現状の面ではその差はほとんどみられない。中世以降の堆積の過程でみられなくなっている。まず、左半分(北側)の低地部についてみる。土層は上層に比べ厚く、0.1-0.2mの層厚をもつ。いずれも砂質の土層で、洪水に伴う堆積であろう。水田耕作土は9層、11層、13層、15-17層で、少なくともみて6面の水田が存在する。この層の厚が約1.2mあり、水田の数に比し堆積した層が厚いことが分かる。時間的には、上層の中世以降の層よりも短かったと考えられ、1回の洪水で堆積する土砂の量が多かったことを物語る。各水田層には畔状の高まりや溝などが見られる。しかし、連続して重なる水田層の同位置に、畔や溝が重なっていくといった状況では必ずしもない。その中で、13層、16層、17層は同様な位置に畔がみられる。また、上層層にみられる溝のうち溝3は、前段で詳述したように溜め井的性格をもつ土層10と連結したもので、併せて水田灌溉用の機能をもつと考えられている。溝3は掘り直しが認められるが、15層、16層の水田層に伴うものと思われる。溝の埋土から土器が出土



第45図 八坂久保田遺跡水田畦畔検出状況

しており、時期的には11世紀末～12世紀初に位置付けられるものであった。よって、15層が洪水により埋没したのはこの頃と思われる。なお、15層上面で牛の足跡多数と若干の人の足跡を確認した。

次に右半分（南側）の状況を試みる。1層は主として12世紀の遺物を含む包含層である。当時の生活面が、建物などの廃絶後に擾乱され形成された層と思われる。他に比べあまり明確ではないが水田耕作上の可能性が高く、北側の9層の水田耕作上と同時期である。この段階では、微高地と低地の段落ちが明瞭である。時期的には古代末～中世初め前後であろう。2層は3層への漸移層である。1層の影響で上層がやや汚れた感じである。この層の上層は、11世紀末～12世紀初集落の遺構検出層である。3層は砂質土で、洪水堆積層である。2層及び3層は表土化しておらず、よって2層、3層併せたものが1回の洪水堆積層と推定される。両層併せて0.6mにも達し、大規模な洪水であったことが分かる。2層及び3層中をみると、ほとんど砂層で礫は含まない。洪水堆積層の核となる部分には大型の礫が大量に含まれ、周辺にいづくにつれ礫が小さくなることを考えれば、土層図のあたりは洪水堆積土の末端に位置することが分かる。当地区の地形を考えれば、人草の上砂を含む洪水は遺跡の南西方向にあたる八坂川が破壊したものと思定される。微高地と低地の境が上層図の中央にあるが、ここは2層と3層の洪水堆積土が約0.6mの厚さをもち堆積していたものが、急激に厚さを減ずる位置にあたる。2層と3層が溝3を覆ってしまっており、溝3の時期を考慮に入れるとこの洪水堆積の時期を12世紀と考えることができる。その後2層上面で建物などの遺構が検出される。この集落の時期が溝3と大差ないことから、洪水後直ちに集落が成立したものと思われる。また、3層下の4層は水田耕作上と考えられることから、2層、3層の大規模な洪水堆積土に覆われる前は、溝3の南側に4層の水田が、北側に15層の水田が各々ほぼ水平に広がる状況であったことが分かる。全体的に水田であったこの地区が、大きな洪水を契機に地形が変わり、一部は水田を復興することができずに集落地になるという変遷を土層からは読むことができる。さらに最下層には、7層とした黒色粘質土層が全体にわりみられる。7層は木質などを多く含む層で、標高は0.6～0.8mである。この層は、プラントオパールの調査で水田層の可能性が高いという結果が得られたため、一部を面的に掘り下げて畦畔などの検出を試みた。

（2）最下層の水田遺構

前段で述べたように、土層では数十面にわたる水田遺構が確認されている。このうち、最下層の水田層にあたる7層については面的な調査を行い、畦畔の検出を試みた（第45図）。

7層をみると（第44図）、右側（南側）から中央付近まではほぼ水平に堆積し、中央から左側（北側）に向けてはやや下がりが気味である。調査区を設けたのは、土層図に中央より北側の位置である。調査は7層の上層にあたる6層の灰色粘質土層を、わずかずつ上げていった。6層、7層とも粘質土であることから、検出しにくい状況もあったが、一部において良好な状態で畦畔を確認することができた。

畦畔は東西方向のものと、南北方向のものがある。東西方向の畦畔には、畦畔5と畦畔6がある。畦畔5は西側の一部について明確に確認することができなかったが、ほぼ直線的に東西方向にのびる。畦畔は余体として幅約3mを測るもので、北に向かい下がる地形にあって、コンタに沿うように作られているものと理解される。畦畔5からは、南北方向の畦畔である畦畔1、畦畔2、畦畔3、畦畔4が南に向かいほぼ直行してのびる。畦畔1、畦畔2、畦畔3、畦畔4はいずれも幅1mほどである。これらに区別されて、水田1、水田2、水田3がみられる。調査区外に及んだり、畦畔の検出が明確にできなかったこともあり水田の全形は不明だが、最小の水田である水田2の東西長は約4mである。一方、畦畔5から北にのびる畦畔は確認されなかった。畦畔5の5～6m北には、畦畔6がある。畦畔6は全体を検出できなかったが、畦畔5と平行して東西方向にのびるものと推定される。さらに畦畔6からは、北に向かい直交方向にのびる畦畔7が狭く。水田は畦畔5と畦畔6の間に水田4が、畦畔6の北側に水田5があるが全形を把握することはできない。

以上のように、7層では小区画水田と思われるものを含む水田区画を確認した。時期については、遺物が出しないうえ明確にはできないが、溝3の時期である11世紀末～12世紀初よりも遡る古代のなかで考えておく。

6 その他の出土遺物

(1) その他の遺構及び遺構検出面出土土器

調査区中央の遺構集中地区において、掘立柱建物物を構成しない柱穴から出土したものや、遺構検出中に出土した土器(第46、47、48図)である。土器には、須恵器、土師質土器小皿と坏、土師器碗、内黒土器、土鍋、須恵器こね鉢、瓦質土器などがある。

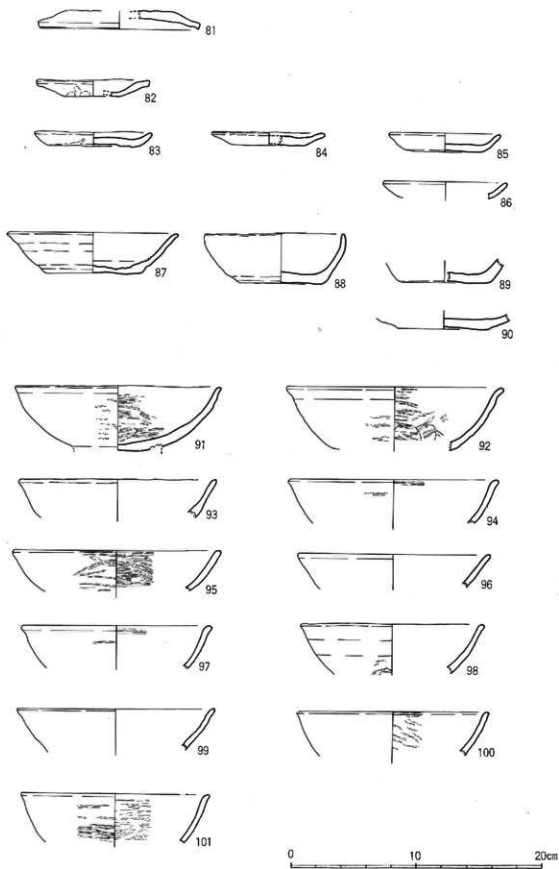
81は須恵器杯蓋である。復元口径12.6cmを測り、縁部は欠く。端部は断状を早する。時期的には8世紀代に位置付けられよう。

82は、いわゆる「て」の字状皿と称される京都系土師器である。乳白褐色を呈し、復元口径8.8cmを測る。口縁部の作りはやや厚めで、のびやかさに欠ける。また、体部下半にはユビオサエが残る。同様な土器である建物6の5(第10図)と比較すると、形態や調整に粗雑化が認められ、法量の小型化が進むなど、5よりも若干時期が下がるものと思われる。京都では12世紀初め頃には、このタイプの皿が姿を消すようで、本品も最終段階に位置付けられるものであろう。

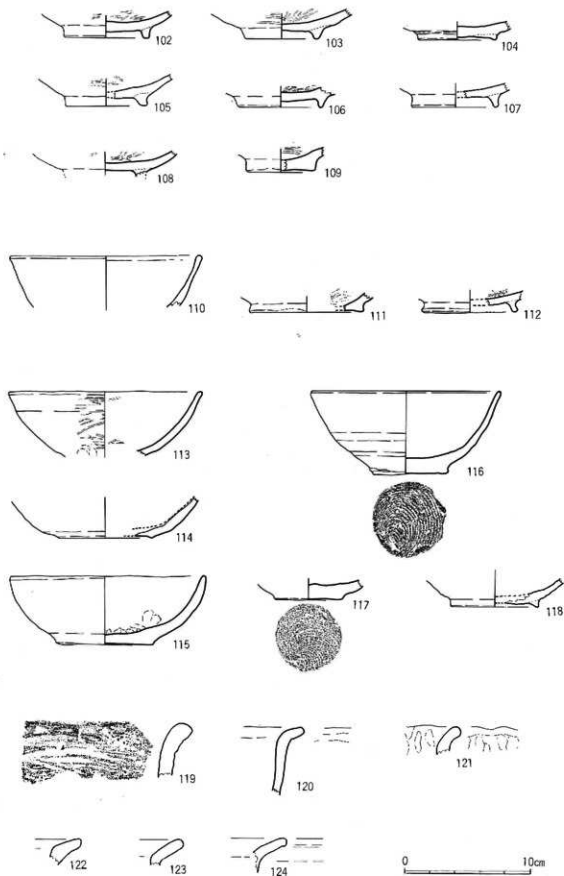
83-86は土師質土器小皿である。83は復元口径9.4cmを測る。底部は回転糸切りで、体部は底部と同様な厚みを有し緩やかに立ち上がる。体部は短く、ほぼ直線的に口縁にいたる。84は復元口径9.0cmを測り、底部は糸切りと推定される。体部は底部に比べると薄く、底部から斜方向に引き上げる感じでのび、外反しながら口縁にいたる。85は復元口径8.8cmを測る。底部は磨減が著しいが、糸切りと思われる。体部は底部と同じ厚みをもち丸みを有し立ち上がる。その後わずかに外反し口縁にいたる。86は底部を欠く資料で、復元口径9.8cmを測る。体部は内湾気味に口縁にいたる。以上の小皿は、形態的にバリエーションをもつが、全体として12世紀初前後に位置付けられるものであろう。

87-90、99は土師質土器坏である。87は復元口径13.3cmを測るもので、底部は糸切りである。体部は底部と同じ厚さで、斜方向に比較的シャープに立ち上がる。そのまま口縁にいたり、端部がわずかに外反気味である。内底面にはヘラ状工具を利用した回転ナデがみられる。器高は3.2cmとやや高い。88は復元口径11.0cmを測る。底部は糸切りで、胎土に金ツモを含む。体部の底部からの立ち上がりは急で、内湾気味に口縁にいたる。器高は4.0cmと、口径に比し器高が高い。89は底部のみの資料である。底部の切り離しはヘラ切りのようにみえる。体部の底部からの立ち上がりは急である。90も底部のみの資料である。底部の切り離しは糸切りである。体部は底部から緩やかに丸みをもち立ち上がる。99は口縁部の資料で、復元口径は15.8cmを測る。体部は中程でややふくらみ、口縁部にむかいわずかに外反する。調整は内外面ともヨコナデで、器形的には87の体部に類似する。以上の時期について、87は口径だけで考えれば13世紀代以降に下がる可能性をもつが、復元径であるため躊躇をおぼえる。形態的には、土壇4の65(第31図)に類似点を求めることもでき、他器種の時期的な状況からも12世紀初前後に位置付けておく。99についても、器形がよく似ていることから、87と同様な時期に位置付けられるものと考えられる。88は形態及び口径からみて、やや時代が下り14、15世紀のものであろう。89については、底部切り離しがいまひとつ明確ではないが、ヘラ切りであれば8、9世紀に位置付けられよう。90は12世紀初前後であろう。

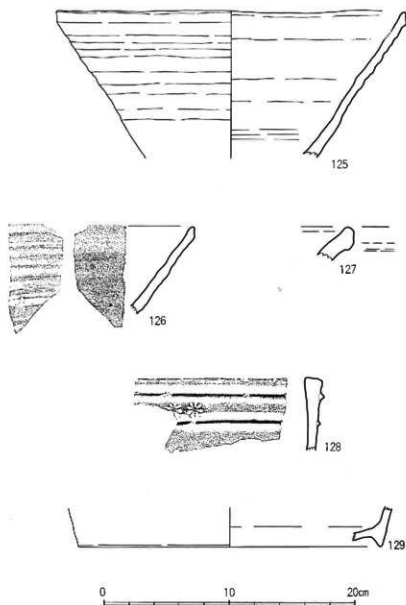
91、93-98、99-109、113は土師器碗である。91は高台を欠く資料で、乳白色を呈する。復元口径16.3cmを測り、口縁部がわずかに外反する。体部には、外面の磨減が著しいものの、内外面にヘラミガキがみられる。内面は横方向に分割ミガキを施した状況が観察される。外底面には糸切り痕跡は認められない。切り離し後に押し出しがなされているので定かではないが、ヘラ切りのようにもみえる。本遺跡出土土師器碗のほとんどが、底部は糸切り離しのままで、押し出しを行わない。そのため、外底面に糸切りの痕跡が明瞭に残る場合が多い。91については底部の状況が異なり、いわゆる吉備系土師器の範疇で考えた方がよいと思われる。93は口縁部の資料である。二次焼成を受けた痕跡をもち、内面にはスス状付着物がみられる。器形は端部がやや丸みを有し、口縁にむかいわずかに外反する。94は口縁端部が短く外反する。内外面とも磨減が著しいが、わずかにヘラミガキを確



第46図 八坂久保田遺跡その他の遺構及び遺構検出面上出土器(1)



第47図 八坂久保田遺跡その他の遺構及び遺構検出出土土器(2)



第48図 八坂久保田遺跡その他の遺構及び遺構検出出土土器(3)

認することができる。95は口縁部破片からの反転復元であるが、浅めの器形が想定される。口縁端部は丸みをもち、内外面ともヘラミガキが施される。96は直線的に口縁部にいたるものである。端部は丸みをもち、内外面の調整は磨滅のため不明である。97は口縁端部が丸みをもち、短く外反する。内外面とも磨滅が著しいが、内面の一部にヘラミガキが残る。98は体部下半が直線的にのび、上半は緩やかに外反し口縁部にいたる。端部は丸みをもちおさめられる。全体的に磨滅が目立つが、外面底部付近にヘラミガキが残る。101は口縁部資料で復元口径15.0cmを測る。器形的には口縁端部がわずかに外反する。体部内外面にはヘラミガキが施される。102は底部資料である。高台は、断面長方形のものがやや外反り気味に直立して付けられる。体部内外面にはヘラミガキが施されている。外底面は磨滅しているが、ナデの痕跡が認められる。103も断面台形の高台が直立して付される底部である。体部内外面はヘラミガキが施される。104は、高台が低く幅広く付されるもので、他の輪高台を付す

底部とは大きく異なる。体部及び内底面については、一部に磨滅もみられるがヘラミガキは認められない。105は乳白色を呈し、断面台形のしっかりした高台が付される。全体的に磨滅が著しいが体部内外面にヘラミガキがみられる。外底面についても磨滅のため不明だが、全体の器形から押し出しがほとんどされていないと推定でき、本来的には糸切り痕が残っていたものであろう。106も乳白色を呈し、断面長方形の高台が内傾気味に付される。内底面にはヘラミガキがみられる。107は断面長方形の高台が外傾して付される。調整は、磨滅のため不明である。108は、高台を欠く底部付近の資料である。外底面には糸切り痕と思われるものが残り、体部内外面や内底面にはヘラミガキがみられる。109は円盤状高台のもので、内底面は円み気味である。底部は糸切りで、内底面にはヘラミガキがみられる。以上の土師器碗は、破片資料が多く金形に分かるものが少ない。輪高台の底部についてみると、91をのぞきほとんどが切り離し後、さほど押し出すことなく高台を貼り付けている。磨滅のため不明なものも多いが、外底面に糸切り痕のみられるものもある。色調も、乳白色など白っぽいものが多く、西瀬川内に分布するいわゆる防長系土師器碗の範疇に入るものであろう。113は底部を欠く資料である。体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁かくでわずかに外反する。体部外面にはヘラミガキがあり、高台付近にはエビオサエがみられる。また、内面にもヘラミガキが施されたようだが、器面が磨滅しており定かでない部分も多い。時期的には、91や円盤状高台の109も含めて12世紀初前後に位置付けられると思われるが、104は高台が低く、他より時期が下る可能性をもつ。

92、100、110～112は内黒土器碗である。92は比較的浅めの器形を呈する。体部下半はあまり丸みをもたず直線気味に立ち上がる。口縁は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。器面の磨滅が著しい部分もあるが、内外面ともヘラミガキが施される。100は復元口径15.2cmを測り、口縁端部がわずかに外反する。110は底部を欠く資料である。復元口径は15.0cmで、口縁端部が丸みを持ち、わずかに外反する。磨滅が著しく、調整は不明である。111は円盤状高台の底部である。外底面には糸切りがみられ、内底面にはヘラミガキが施される。112も底部で、断面長方形のやや細めの高台が外傾して付される。端部はやや肥厚気味である。内底面にはヘラミガキが施される。以上は、12世紀初前後の時期に位置付けられる。

114～118は瓦器及び須恵器の碗である。113は底部を欠く資料である。体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁かくでわずかに外反する。体部外面にはヘラミガキがあり、高台付近にはエビオサエがみられる。また、内面にもヘラミガキが施されたようだが、器面が磨滅しており定かでない部分も多い。114は底部付近の資料である。色調など、一見して土師器にみえる部分もあるが、形態などから瓦器碗と考えた。底部の高台は退化した低いものである。体部外面にはヘラミガキがみられず、内面は剥落のため調整不明である。115は瓦器碗の完形品である。底部は平底で、明瞭な糸切り痕が残る。体部は全体に厚手で、内傾気味に立ち上がり口縁部にいたる。体部にはヘラミガキはみられず、内底面には不定方向のナデがみられる。本品は東国東型瓦器碗とされるものである。116は須恵器碗である。底部は厚く円盤高台状を呈し、底部切り離しは糸切りである。体部は底部に比し薄く、直線的に口縁にいたる。体部の調整は、内外面ともナデである。本品は、東瀬系のものであると考えられる。117は東国東型瓦器碗の底部である。底部は糸切りであるが、115に比べると底径が小さい。118は瓦器碗の底部と思われる。外底面には糸切り痕が残り、やや低い断面三角形の高台が付く。体部内外面には、ヘラミガキは認められない。以上の時期は、113が12世紀代、114が13世紀中頃、115と117が13世紀後半～14世紀初、116は12世紀初前後、118が13世紀前半に位置付けられる。

119～124は土鍋である。119は厚手のもので、小破片のため口径の復元にはいたらなかった。比較的粗い作りで、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は肥厚気味である。調整は、外面がへら状工具による強い横方向のナデ、内面が板状工具による横方向のナデである。120は口縁部が緩やかに外方に折れるものである。口縁部内外面がヨコナデ、体部内外面が板状工具による横方向のナデである。121はやや粗い作りで、口縁部が緩やかに広く折れる。体部内外面には、エビオサエの痕跡が観察される。122は口縁部が外方に強く折れるもので、頭部の内側に後をもつ。頭部の折れ曲がる部分は肥厚気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は板状工具による横方向のナデ。123は122と同様な器形を呈するが、頭部が肥厚せず、体部から口縁にむかい同じ厚みをもつ。124

は口縁部のみで、頸部も欠く。120のような器形をなすのか、122のような器形をなすのかは定かではないが、口縁上面がわずかに湾曲することから120のような器形を呈するものと推定される。

125は須恵器こね鉢である。体部は、底部から斜方向にのび、口縁部が上方にやや尖り気味に引き上げられる。体部外面にはロクロ痕跡を明瞭に残す。内面はロクロ痕跡をナデで消している。126は125と同一個体と思われる。これらは東播系のものであろう。127は甕の口縁部と思われる。

128、129は瓦質土器火鉢である。128は口縁部の資料で、外面に2条の突帯を付し、突帯間にスタンプ文が配される。口縁部付近はやや肥厚する。129は底部である。脚が付かず高台状をなすもので、一定の間隔をもち掛りかいはいる。突帯等はまったくみられない。時間的にはいずれも16世紀代に位置付けられるものである。このうち128は16世紀前半を中心とした時期のものであるが、使用年代としては後半まで下がる場合もある。また、129は16世紀後半に出現するものと考えられる。

(2) 調査区南隅出土土器

調査区南隅の砂礫層から、若干の混ざりがあるもの土器片がややまとまって出土した(第49図)。遺構に伴うものではなく、洪水堆積層中に含まれるものである。土器には著しくローリングを受けた痕跡がみられないことから、比較的近い地点から流されてきたものと推定される。土器が出土する砂礫層は、第49図の第2、3層に対応すると考えられ、洪水時の時期比定をする際の材料になりそうである。加えて、周辺にどのような時期の遺跡が形成されていたかを知る手がかりにもなる。

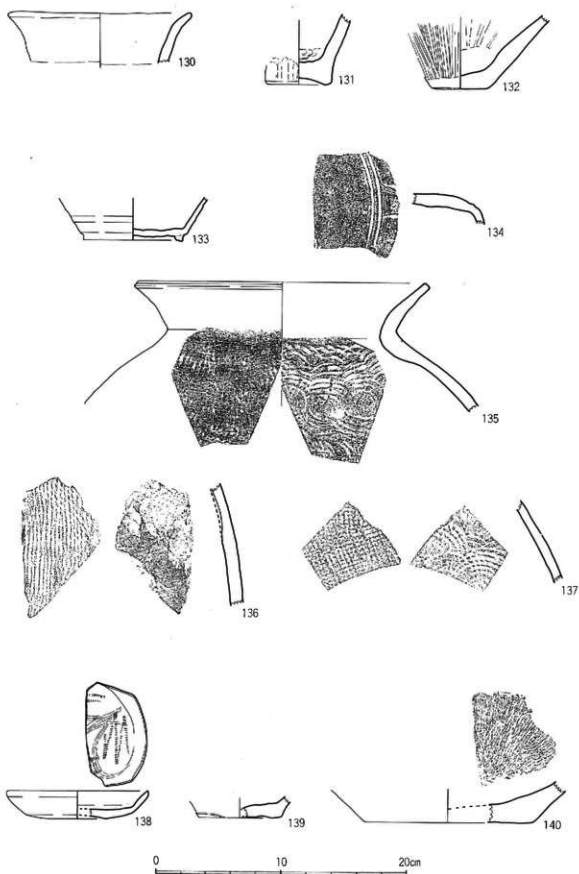
130-132は弥生時代の土器である。130は甕の口縁部である。頸部から上の資料で、斜方向に立ち上がる頸部から口縁部がわずかに外反する。調整は内外面ともヨコナデである。131、132は底部資料である。131はやや上げ底の底部で、外面底部ちかくにはケズリ状のナデがみられる。132は平底で、外面には縦方向のハケメ、内面には縦方向のハケメとユビオサエなどがみられる。

133-137は須恵器である。133は坏で、底部はヘラ切りの後ナデられ、底部の端に高台が付される。高台は断面方形のあまり高くはないもので、端部が外方につままれる。体部は直線的にのび、調整は内外面とも回転を利用したナデである。時間的には、8世紀末-9世紀初に位置付けられる。134は蓋の肩部と思われる。径の復元にはいたらなかったが、大型品と推定される。肩の屈曲部に2条の沈線がみられる。135は甕である。復元口径22.6cmの比較的小型品である。球状の肩部から口縁がくの字状に折れる。胴部外面には格子目タタキが、内面には同心円タタキがみられる。136、137は甕の胴部片である。136は外面に平行タタキがみられるが、内面は横方向のナデである。137は外面に格子目タタキ、内面に同心円タタキがみられる。134-137の時期についても、133と同様な時期であると推定される。

138は阿安窯系片磁器である。内底面に梅捕きの文様などがみられる。時間的には、12世紀後半に位置付けられる。

139は土師質土器の底部である。復元底径6.4cmを測るもので、底部糸切りである。法登からみれば小皿と考えられるが、器壁が厚くやや違和感もある。

140は混ざり込みの可能性が高い遺物である。陶器拵鉢で、内面に密な摺目が施される。時間的には近世の所産である。



第49図 八坂久保田遺跡調査区南隅出土土器

(3) 表採土器

ここでは、調査区内で表面採集された土器など(第50、51図)を紹介する。採集されたものは、土鍾、土師器、須恵器、土銅等である。

141は土鍾である。大型の製品で、長さ7.5cm、最大径3.1cmを測る。形態的には円筒形を呈し、中程がやや膨らみ気味である。長軸方向の中央に孔が穿たれるが、径約1cmほどである。また、表面には1ヶ所のみ長軸方向に沿い、幅0.5cmの浅い沈線状のものがみられる。全体の調整は、ユビオサエが顕著である。時期的には特定しがたいが、中世の範疇でとらえておく。

142は土師器坏で、復元底径は6.6cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りで、その痕跡を明瞭に残す。全体に角張った器形で、底部から体部が直立気味に立ち上がる。体部の調整はヨコナデなどで、ヘラミガキやケズリはみられない。時期的には9世紀代にはいるものか。

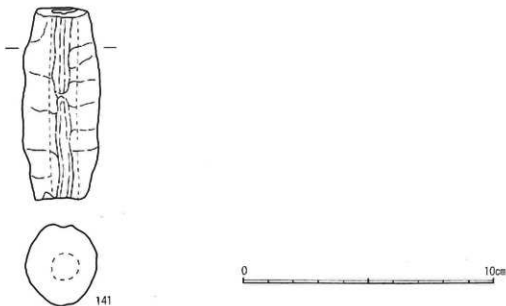
143は須恵器坏である。復元底径10.0cmを測るもので、断面方形の比較的低い高台が付く。高台は底部の端に付されるもので、8世紀末～9世紀初の所産であろう。

144は土師器碗である。口縁部資料であるが、小破片のため口径の復元にはいたらなかった。色調は白褐色を呈し、口縁部が短く外反する。体部内外面にはいねいなヘラミガキが施される。ヘラミガキは主として横方向のもので、部分的に縦方向のものもみられる。時期的には12世紀初前後に位置付けられる。

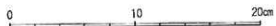
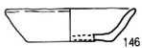
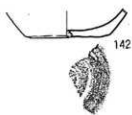
146～148は土師質土器である。146は坏で、小破片から径を復元している。そのため、やや正確さを欠き、本来的にはまだ口径が大きい可能性をもつ。147も坏である。口縁部を欠く底部のみの資料で、底部には糸切り痕が残る。体部の底部からの立ち上がりはシャープである。148も坏で、147と同様な器形を呈する。底部は糸切りで、体部内面にはヘラ状工具を利用したロクロ痕が残る。以上のうち147、148は16世紀代の所産と考えられる。

145、149は土銅である。145は口縁部の小破片で、口径の復元にはいたらなかった。頸部から強く折れるもので、その形態は逆し字状にちかい。頸部の内面には稜がつく。調整は、内面が横方向のハケメ、外面がユビオサエで、端部は丁寧にナデられている。149も口縁部資料である。145に比べると長めの口縁が、緩やかにくの字状に折れる。頸部内面には軽い稜がつく。調整は、外面が板状工具による縦方向のナデ、内面がナデである。時期は、149が12世紀初前後と考えられ、145は149より下り12世紀後半から13世紀にかかる段階に位置付けられる。

150は肥前磁器筒形碗である。復元口径6.0cmを測るもので、時期的には18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられる。



第50図 八坂久保田遺跡表採土器製品



第51図 八坂久保田遺跡表探土器

第3章 まとめ

八坂川が大きく迂行する部分の右岸に位置する本遺跡は、河側を川に挟まれ細長くのびる地形を呈する。そのため、度重なる洪水被害を受けており、遺跡は洪水との闘いのなかで形成されたと言っても過言ではない。以下では、その状況を段階的に述べまとめたい。なお、層位名は第44図のものを使用する。

第I段階

本遺跡で最初に水田が作られた段階である。7層にあたり、その上面は標高0.6~0.8mを測り南から北に向かい緩やかに下る。この下層は砂礫層を中心とした自然堆積層で、標高からみても不安定な地形であったことがうかがえる。水田は1辺数m単位の小区間水田を含むもので、微地形に沿うように叫呼が展開する様子を確認できる。水田を形成する層は木質などを多量に含んでおり、地下水位が高かったものと思われる。そのため、大水にたよる初歩的な水田経営がなされたと推定される。時期を特定する材料がないが、古代のなかで考えられよう。

第II段階

引き続き水田として利用されており、4~6層、15~17層がこの段階に相当する。地形的には前段階同様に、南から北に向かい緩傾斜を呈するもので、洪水堆積が進行しこの段階の地表面は標高1mほどになる。水田の面的な空洞を行っていないため、具体的な水田区画は不明である。この段階の水田には東西方向に平行する溝3や溝4が作うが、その間隔や方向から微地形を克服したやや規模の大きい水田が展開していたことがうかがえる。しかし、この付近一帯にみられる日野・中条里とは方位を異にする。とは言っても、水田の規模から考えて、河川灌漑などの用水システムを整えたものであったと推定される。溝3は若干の掘り直しが認められるが、最終的に埋没したのは、12世紀初頃前後と思われる。

第III段階

大規模な洪水堆積があり、地形が大きく変わる。堆積層は2層と3層で、前段階の溝3を境に南側では約0.6m、北側では約0.2mを測る。このため、ほぼ平坦であったこの地区に明らかな段が形成され、地形的に微高地と低地に分かれることになる。基本的には、水田は低地部のみを展開し、微高地には水田にかわり集落が進出する。しかし、一部微高地上でも水田が形成されたであろうことが、農業用灌漑井戸と思われる井戸の存在で分かる。周辺でも大きな地形的な変化が生じたと考えられ、第II段階の水田に大きな打撃を与えたものと思われる。微高地上の集落は12世紀前半の短期間存続したのみであるが、荒廃した水田の再開発を担ったと理解される。同様な時期に、八坂川の対岸にある八坂中遺跡でも、条里水田が放棄され大規模な集落が進出する。河床低下などにより、用水供給システムに支障が生じたためと推定される。本遺跡の第III段階にみられる大規模洪水が、その要因であった可能性が高い。12世紀初頃前後から前半の時期である。

第IV段階

集落が撤退し、再び全面的に水田化する。しかし、前段階に生じた地形の段は解消されていない。現状では、この付近に地形的な目立った段はみられないので、洪水による埋積が進行するなかで段が消えていくものと思われる。この段階は現在にいたるまで約1mの進積をみるが、その大部分の層は数cmほどの薄いものである。第III段階までの層が0.2mほどの厚い堆積であるの対照的である。これは、何度となく洪水にみまわれたが、水田層を完全に覆ってしまうような大規模な堆積は伴わないことを物語る。すなわち、水はかぶるが、多量の土砂を運ばない洪水へと変化したものである。河床や自然堤防の状況が年代とともに変化する、大規模な土砂堆積を伴うものから伴わないものへと移るものであろう。前者は大規模な地形改変も同時に起こるが、後者では目立った地形変化はなく、地形的には安定した状態になる。

溝1は、12世紀前半の集落を検出する層よりも上層で検出された。やや方位がずれるが、日野・中条里の末端にあたるものと推定される。遺跡の大部分は条里地帯外にあたり、用水供給も含めその開発が条里地域とは別に行われた可能性が高い。

八坂久保田遺跡出土土器観察表

第8回 建物3

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・白色粒子。 外周赤褐色(すず付着) 内面淡褐色	-	内径直ミガキ	24号土溝
2	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・石英。 淡褐色	-	内径直ミガキ 口縁部スリ文様	24号土溝
3	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石(1ミ以下)。 灰白色	-	内径直ミガキ	24号二溝
4	土師器碗	-	5.7	-	長石・角閃石・その他。 灰褐色	断面長方形の高さをほり付け	内面ミガキ。 外周ミガキ・ヨコナデ。 外周部 回転状横ナデ	24号土溝

第10回 建物6

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
5	京都系土師器 皿	9.4	-	1.4	長石・赤色粒子。 乳白色	平づくね成形 口縁部でのす状	内面 見込み不定方向のナデ。 ヨコナデ 外周 ヨコナデ・ナデ	10号土溝

第13-14回 井戸1

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
6	土師質土器杯	-	-	-	長石・角閃石・赤色粒子。 灰白色	体部の立ちあがり比較的緩やか	内面 見込み不定方向のナデ。 回転状ナデ・ヨコナデ 外周 ナデ・ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
7	土師質土器 小皿	(8.9)	(4.4)	2.2	長石・角閃石。 淡褐色	口縁に比し器高が高い 口縁部は丸くおさめる	内面 口ノコ回転によるヨコナデ 外周 口ノコ回転によるヨコナデ ナデ・ナデ。底部糸切り	1号井戸
8	土師質土器 小皿	(9.2)	(7.2)	1.4	長石・角閃石・石英。 淡褐色	器壁が厚く、口縁が尖り気味	内面 見込み不定方向のナデ。 ヨコナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
9	土師質土器 小皿	9.2	6.4	1.4	長石・角閃石・赤色粒子。 赤褐色	体部の立ちあがり緩やか	内面 見込み不定方向のナデ。 回転状ナデ・ヨコナデ。 外周 ヨコナデ。底部糸切り。極 度平直	1号井戸
10	土師質土器 小皿	(6.5)	5.8	1.3	長石・角閃石・石英。 褐色	口縁部外反	内面 不定方向のナデ。回転状 のナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
11	土師質土器 小皿	(8.2)	(6.2)	1.2	長石・角閃石・赤色粒子。 赤褐色	体部の立ちあがり緩やか	内面 不定方向のナデ・ヨコナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
12	土師質土器 小皿	(9.2)	(6.8)	1.5	長石・角閃石・灰色粒子。 淡褐色	体部はやや内湾気味	内面 ヨコナデ。不定方向のナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
13	土師質土器 小皿	(9.8)	(6.2)	1.8	長石・角閃石・石英。 褐色	口縁部わずかに外反	内面 ヨコナデ。不定方向のナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
14	土師質土器 小皿	(8.8)	-	-	長石・角閃石・赤色粒子。 赤褐色	体部の立ちあがり緩やか	内面 回転ナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
15	土師質土器 小皿	(10.0)	(8.2)	9.8	長石・角閃石・灰色粒子。 淡褐色	口縁部わずかに外反	内面 不定方向のナデ・ヨコナデ 外周 ヨコナデ。底部糸切り	1号井戸
17	土師器碗	16.0	6.3	6.1	長石・角閃石・石英・雲母・ 砂粒。 淡褐色	口縁部外反 断面長方形の高さをほり付け	内面 ナデ。ミガキ 外周 ナデ後ミガキ。底部糸切り 。基部斜り付け	1号井戸
18	土師器碗	(17.4)	-	-	長石・角閃石・石英。 赤褐色	口縁部肥厚気味	内径直ミガキ	1号井戸
19	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・石英。 淡褐色	-	内面ミガキ。 外周ヨコナデ後ミガキ	1号井戸
20	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・石英。 外周反色	口縁部外反	内面ミガキ 外周ヨコナデ後ミガキ	1号井戸
21	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・石英	-	内面ヨコナデ後ミガキ・ヨコナ デ 外周	1号井戸
22	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石・その他。 灰白色	口縁部肥厚気味	内径直ナデ	1号井戸
23	土師器碗	-	-	-	長石・角閃石。 淡褐色	口縁部外反	内径直ヨコナデ後ミガキ	1号井戸
24	土師器碗	(17.2)	-	-	長石・角閃石・石英	口縁部肥厚気味	内径直ナデ後ミガキ	1号井戸
25	土師器碗	-	(6.0)	-	長石・角閃石・石英。 淡褐色	断面長方形の高さをほり付け	内面 ナデ後ミガキ・ヨコナデ後 外周 ナデ後ミガキ。底部糸切り	1号井戸
26	土師器碗	-	(6.0)	-	長石・角閃石・赤色粒子。 内周淡褐色 外周淡赤褐色	高さをほり付け筋は厚い	内面ミガキ。 外周ミガキ・ヨコナデ。底部糸 切り	1号井戸
27	土師器碗	-	(5.3)	-	長石・角閃石・石英。 灰白色	断面長方形の高さをほり付け	内面ミガキ。 外周ヨコナデ・ヨコナデ後ミガ キ。底部糸切り	1号井戸
28	土師器碗	-	(7.0)	-	長石・角閃石。 淡褐色	断面長方形の高さをほり付け	内面 回転ナデ後ミガキ 外周 ミガキ・ヨコナデ。底部糸 切り	1号井戸
29	土師器碗	-	(7.0)	-	長石・角閃石・石英・白色粒子 乳白色	断面長方形の高さをほり付け	内面ミガキ 外周ミガキ・ヨコナデ。底部糸 切り 内面ミガキ・ヨコナデ・ナデ後ミ ガキ	1号井戸
30	土師器碗	-	(6.6)	-	長石・角閃石・白色粒子。 暗赤褐色	円盤状高台	外周 横方向のナデ。工具によ るナデ。底部糸切り	1号井戸
31	土師器碗	-	(7.8)	-	長石・角閃石・石英・赤色粒子 淡褐色	円盤状高台	内面 回転状のナデ・ヨコナデ 外周 ヨコナデ・ナデ・ケズリ状 のナデ	1号井戸
32	土師器碗	(11.4)	(4.9)	4.9	長石・角閃石。 暗灰色	底部押し出し 断面長方形の高さをほり付け	内面 丁寧なミガキ 外周 ミガキ・ヨコナデ後ミガキ。 スリ文様	1号井戸
33	土師器碗	(12.3)	-	-	長石・角閃石・石英。 暗赤褐色	32と同様な器形	内面ミガキ 外周ヨコナデ後ミガキ。ユビオ ツミミガキ	1号井戸
34	須恵器碗	(14.8)	-	-	長石・角閃石・石英。 黄灰色	口縁部わずかに外反	内径直ヨコナデ	1号井戸

35	内窯土器	-	(7.8)	-	長石・黄閃石・石英・内淡灰色・外濃褐色	断面長方形の高台をはり付け	内面 ミガキ 外面 ナデ, 底部魚切り	1号井戸
36	白磁碗	(15.0)	-	-	内外面 灰白色釉	口縁部は玉縁状	内面 貫入	4号井戸
37	白磁碗	-	-	-	内外面 灰白色釉	口縁部は玉縁状	内面 貫入	4号井戸
38	須臾器鉢	(36.8)	-	-	長石・黄閃石・石英・灰色	口縁部張り気味 外面口縁下に強いココナデ	内面 貫入, 割落 外面 一部割落	1号井戸
39	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・金雲母・石英・内赤褐色・外濃赤褐色	口縁部はくの字状に折れる	内外面 ココナデ 外面 ムドオサエ	1号井戸
40	土鍋	(33.6)	-	-	長石・黄閃石・灰色粘土・赤色粘土・内赤褐色・外濃赤褐色	口縁部はくの字状に折れる	内面 板状工具によるココナデ 外面 タテハケ, 工具によるココナデ	1号井戸

第20回 井戸2

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
47	土師質土器鉢	-	(8.0)	-	長石・黄閃石・金雲母・赤色粘土	縁部の立ちあがりはやや緩やか	内面 ココナデ 外面 ナデ, 底部魚切り	2号井戸
48	土師質土器小鉢	(7.2)	(6.8)	1.25	長石・黄閃石・砂粒・赤褐色	縁部の立ちあがりはやや緩やか 縁部外面	内外面 ココナデ 外面魚切り, 板状気味	2号井戸
49	土師器碗	(17.6)	-	-	長石・黄閃石・金雲母・茶褐色粘土・赤褐色・やや白っぽい	深めの形態を呈する	内面 ミガキ 外面 ココナデ後ミガキ, ナデ	2号井戸
50	土師器碗	(16.0)	-	-	内面 白色粘土・乳白色	口縁部厚縁, 外反	内面 ココナデ後ミガキ 外面 ココナデ, ナデ	2号井戸
51	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・白色	口縁部外反	内外面 ナデ後ミガキ	2号井戸
52	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・赤色粘土・赤褐色	口縁部直立	内面 ミガキ, ナデ 外面 ココナデ, ナデ後ミガキ	2号井戸
53	土師器碗	-	6.1	-	長石・黄閃石・赤色粘土・淡灰白色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 薄層の高平形 外面 ミガキ, ナデ 厚さ取り付け	2号井戸
54	縄文型瓦器鉢	15.4	5.5	5.8	長石・灰白色粘土・淡黄灰色	口縁部内面に上流1条	内面 ミガキ, ナデ 外面 ココナデ, ナデ後ミガキ	2号井戸
55	和泉型瓦器鉢	(15.0)	(8.0)	5.5	石英	底径が広い断面長方形の高台をはり付け	内面 ヘラミガキ 外面 ココナデ後ミガキ 外底 ムドオサエ	2号井戸
56	土鍋	(16.6)	-	-	長石・黄閃石・金雲母・石英・その他粘土・内赤褐色・外濃赤褐色	口縁部はくの字状に折れる	内面 ナデ 外面 タテハケ	2号井戸

第21回 井戸3

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
58	土師器碗	-	7.0	-	長石・黄閃石・その他・内白褐色・外濃褐色	円盤状高台	内面 全体の厚層するがミガキ 外面 ミガキ, ナデ, 底部魚切り	1号土壌

第25回 土壌1

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
59	土師器碗	(15.6)	-	-	長石・黄閃石・赤色粘土・灰色粘土	口縁部は丸くおさめる	内面 丁寧なミガキ 外面 ココナデ後ミガキ	1号土壌
60	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・その他・赤褐色	口縁部わずかに外反	内面 丁寧なミガキ 外面 ココナデ後ミガキ	1号土壌

第27回 土壌2

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
61	土師質土器小鉢	9.8	7.4	1.4	長石・黄閃石・赤褐色粘土・赤褐色	底部外反気味	内面 ナデ 外面 ココナデ, 底部魚切り, 板状気味	2号土壌
62	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・白色粘土・薄装された胎土・黄褐色	口縁部外反	内外面 ココナデ後ミガキ	2号土壌
63	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・その他・灰白色	口縁部直立, 縁部を丸くおさめる	内面 丁寧なミガキ 外面 ココナデ後ミガキ	2号土壌

第29回 土壌3

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
64	土師器碗	-	-	-	長石・黄閃石・その他・灰白色	口縁部外反	内面 ココナデ後ミガキ 外面 ココナデ後ミガキ	3号土壌

第31回 土壌4

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
65	土師質土器杯	(16.5)	(5.4)	3.7	長石・黄閃石・赤褐色粘土・灰色粘土・黄褐色	底部は直線的にのびる 口縁部は丸くおさめる	内面 ナデ, ココナデ 外面 ココナデ, 底部魚切り	4号土壌
66	土師質土器杯	(14.4)	(4.5)	3.7	長石・黄閃石・茶褐色粘土・黄褐色	底部内淡気味に立ちあがり 口縁部やや外反気味	内面 ナデ, ココナデ 外面 ココナデ, ヘラナデ, 底部魚切り	4号土壌
67	土師器碗	-	-	-	長石・石英・乳白色	-	内面 ミガキ 外面 ミガキ, ココナデ	4号土壌

第32回 土壌5

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
68	土鍋	(19.6)	-	8.8	長石・黄閃石・金雲母・白色粘土・内赤褐色・外濃赤褐色	口縁部は短く折れる 底部は丸気味	内面 ナデ 外面 ココナデ, ナデ	5号土壌

第40図 基石

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
69	瓦器焼 五器焼	(16.2)	(5.6)	5.3	長石・角閃石・白色粒子。 内面黄褐色 外側黄褐色	体部座縁的にのびる 高台は断面三角形の低いもの	内面ミガキ、ユビオサエ 外側 ケズリ状のミコナデ、ユビ オサエ粒子、魚目目	1号配石2
70	土師器工器 焼	—	(6.0)	—	砂粒・白色粒子。 黄白色	断面三角形の高台をはり付ける	内面 ナナヘラミガキ 外側 ヲコナデ、ミガキ	配石下

第43図 甕

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
74	土師器土器 小皿	(9.2)	(6.2)	1.4	長石・角閃石、 褐色	体部は丸みをもちたがりあり、口縁 部はわずかに外反する	内面 不整方向のナデ、ヨコナデ 外側 ヲコナデ、底部糸切り反復 状文様	3号溝
75	土師器焼	—	—	—	長石・角閃石、 灰白褐色	—	内面 丁寧ミガキ 外側 ヲコナデ後一筋ミガキ	3号溝
76	土師器焼	—	—	—	長石・角閃石・石英、 黄灰色 口縁部は黄灰色	—	内面 丁寧ミガキ 外側 ヲコナデ後一部ミガキ	3号溝
77	土師器焼	—	—	—	石英 灰白色	口縁部肥厚し、やや外反	内面 ヲコナデ 外側 強いヨコナデ、ヨコナデ	3号溝
78	土師器焼	—	—	—	長石・角閃石・その他、 灰白色 口縁部は黄灰色	—	内外面 ヲコナデ	3号溝
79	土師器焼	—	(6.2)	—	長石・角閃石・赤色粒子・石英 ・金雲母・白色粒子、 灰白褐色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 ミガキ 外側 横方向のミガキ	3号溝
80	土師器焼	—	(6.6)	—	長石・角閃石・その他、 灰白色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 部分約ミガキ 外側 ヲコナデ	3号溝

第46図 その他・種出(1)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
81	調査器 沙蓋	(12.8)	—	—	石英・角閃石、 淡黄灰色	口縁部くぼし状	内面 横方向のナデ、ヨコナデ 外側 ケズリミガキ	03区
82	黒部高土師器 小皿	(8.6)	—	—	長石・赤色粒子、 灰白色	平つね成形 口縁部での平反	内面 ナデ 外側 ユビオサエ、ヨコナデ	D9区
83	土師器土器 小皿	(13.4)	(7.4)	1.1	長石・角閃石・茶色粒子、 黄白色	体部の立ちあがりは緩やか	内外面 ヲコナデ、底部糸切り	8号土溝
84	土師器土器 小皿	(9.0)	(5.6)	1.05	長石・角閃石・その他、 灰白色	体部緩やかに外反	内外面 ヲコナデ、底部糸切り	E9区
85	土師器土器 小皿	8.8	6.4	1.4	長石・角閃石・その他、 灰白色	体部の立ちあがりはや丸をもつ 口縁部やや外反	内面 ヲコナデ 外側 ヲコナデ、底部糸切り	E9区
86	土師器土器 小皿	9.8	—	—	長石・角閃石・その他、 灰白色	体部内湾気味	内外面 ヲコナデ	D1区
87	土師器土器杯	13.3	7.8	3.2	長石・角閃石・茶色粒子、 灰白色	体部は座縁的にのびる	内面 ヘウラ工によるヨコナデ 外側 ヲコナデ	E11区
88	土師器土器杯	(11.0)	6.6	4.0	長石・角閃石・金雲母・赤色粒子 ・黄褐色	体部は直立気味に立ちあがる	内面 不整方向のナデ、ヨコナデ 外側 ヲコナデ、底部糸切り	D7区
89	土師器土器杯	—	—	—	長石・角閃石・赤褐色粒子、 黄褐色	体部は直立気味に立ちあがる	内面 ヲコナデ、 外側 ヲコナデ、底縁へ丸目入り	E8区
90	土師器土器杯	—	—	—	長石・角閃石・石英・その他、 褐色	体部の立ちあがりは緩やか	内面 不整方向のナデ、ヨコナデ 外側 ヲコナデ、底部糸切り	D9区
91	土師器焼	16.3	—	—	長石・角閃石・石英、 黄褐色 灰白色	口縁部、口縁部わずかに外反	内面 丁寧ミガキ 外側 ヲコナデ後ミガキ	D9区
92	内裏土器焼	(17.2)	—	—	長石・角閃石・赤褐色粒子 ・黄褐色 ・内・灰白色 ・外・黄白色	口縁部外反	内面 ユビオサエ後ミガキ、ヨコ ナデ 外側 ヲコナデ	E2区
93	土師器焼	(15.4)	—	—	長石・角閃石、 黄褐色 灰白色	体部上平わずかに外反気味	内外面 ヲコナデ (二次焼成あり)	D9区
94	土師器焼	(16.4)	—	—	長石・角閃石・石英・石粒・赤 色粒子、 灰白色	口縁部短く外反	内外面 ミガキ (薄黒着しい)	28号土溝
95	土師器焼	(16.4)	—	—	長石・角閃石・その他、 灰白色	体部は浅い	内外面 ミガキ	45号土溝
96	土師器焼	(14.4)	—	—	長石・角閃石・白色粒子、 灰白色	体部は座縁的に口縁へ	厚黒着しい	E8・9区
97	土師器焼	(15.0)	—	—	長石・角閃石・白色粒子・石英 ・灰白色	口縁部短く外反	内面 ミガキ 外側 ミガキ (坐縁的に座縁)	20号土溝
98	土師器焼	(14.4)	—	—	長石・角閃石・白色粒子、 灰白色・やじり褐色	口縁部わずかに外反	内面 厚縁のため不明 外側 ヲコナデ後ミガキ	E9区
99	土師器焼	(15.8)	—	—	長石・角閃石・赤褐色粒子、 黄褐色やや白色	体部上平外気味	内外面 工具によるヨコナデ	11号土溝
100	内裏土器焼	(15.2)	—	—	長石・角閃石・その他、 内・黄褐色 外・灰白色	口縁部短く外反	内面 ミガキ 外側 ヲコナデ、ナデ	11号土溝
101	土師器焼	(15.0)	—	—	長石・角閃石・白色粒子・粘土 ・黄褐色	口縁部短く外反	内外面 ヲコナデ後ミガキ	35号土溝

第47図 その他・種出(2)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
102	土師器焼	—	(6.0)	—	長石・角閃石・石英・その他、 灰白色	断面方形の高台をはり付ける	内面 ミガキ(厚縁) 外側 ミガキ、ナデ	E7・2区
103	土師器焼	—	(5.8)	—	長石・角閃石・その他、 灰白色	断面方形の高台をはり付ける	内面 ミガキ 外側 ナデ後ミガキ、ヨコナデ	E7・4区
104	土師器焼	—	(6.0)	—	砂粒・長石・角閃石、 黄褐色	断面三角形の低い高台をはり付け る	内面 ナデ(厚縁) 外側 ヲコナデ	5区
105	土師器焼	—	(6.4)	—	長石・角閃石・石英、 灰白色	断面方形の高台をはり付ける	内面 ミガキ 外側 ミガキ、ヨコナデ	D7・3区
106	土師器焼	—	(7.0)	—	長石・白色粒子、 灰白色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 ユビオサエ後ミガキ 外側 ヲコナデ	A9区
107	土師器土器 皿	—	(7.0)	—	長石・角閃石・石英・白色粒子	断面長方形の高台をはり付ける	内面 ヲコナデ (四次焼成も確認)	E13区
108	土師器焼	—	—	—	長石・角閃石・その他、 黄褐色	底部非押し出し	外側 ミガキ、ヨコナデ、ナデ、厚 縁あり	D7・3区
109	土師器焼	—	(5.6)	—	長石・角閃石・その他、 黄褐色	円盤状高台	内面 ミガキ 外側 ヲコナデ、糸切り	4・3区

110	内黒土器埴	(15.0)	-	-	長石・黄閃石・赤色粒 子、内淡灰色 (内)灰白色	-	内外面とも平滑	E8-9区
111	内黒土器所	-	3.0	-	長石・黄閃石・その他、 内淡灰色 (内)淡褐色	内壁状突起	内面ミガキ 外面ヨコナデ、底部丸切り	E9区
112	内黒土器埴	-	7.0	-	長石・黄閃石・赤色粒 子、内淡灰色 (内)淡褐色	断面長方形の高い蓋台をほり付け	内面ミガキ 外面ヨコナデ、蓋台丸切り	E9-10区
113	土師器埴	(19.2)	-	-	長石・黄閃石・その他、 黒褐色	底部は比較的浅めである	内面ミガキ 外面ミガキ、ユビオサ エッジナデ	O3区
114	瓦器埴	-	7.3	-	長石・黄閃石・石英、白色粒 子、内淡灰色 (内)淡褐色	断面三角形の低い蓋台が行される	内面 平滑 外面 ヨコナデ、底部丸切り(?) 蓋台斜け付け	D3区
115	瓦器埴	15.3	7.6	5.4	長石・黄閃石・石英、 灰白色 (内)淡褐色	底部平直	内面 ヨコナデ、ユビオサ 外面 ヨコナデ、底部丸切り	E7-10区
116	須恵器埴	15.0	5.6	6.5	長石・黄閃石・石英、白色粒 子、淡青 色	底部平直	内面 ヨコナデ、不定形のナデ 外面 ヨコナデ、底部丸切り	第3 トレンチ
117	瓦器埴	-	5.4	-	長石・黄閃石・石英、 淡褐色	底部平直	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部丸切り	D7-1区
118	瓦器埴	-	7.0	-	石英粒・石粒、 淡青灰色	断面三角形の蓋台を付す	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部丸切り	9号土溝
119	土鍋	-	-	-	砂粒・長石・黄閃石・石英、灰 色粒 子、赤褐色	口縁部緩やかに外反	内面 板状工具によるヨコナデ (厚壁) 外面 ヘラ状工具によるヨコナ デ	D9区
120	土鍋	-	-	-	砂粒・長石・黄閃石・石英、灰 色粒 子、赤褐色	口縁部外方に折れる	内外面 板状工具によるヨコナ デ、ヨコナデ	E9区
121	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・石英、赤色粒 子・その他、 内暗茶灰色 (内)淡褐色	口縁部短く外反	内外面 ヨビオサエ、ヨコナデ	O9区
122	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・石英、 赤褐色	口縁部外方に折れる	内面 板状工具によるヨコナデ、 ナデ 外面 ヨコナデ	O9区
123	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・金雲母、 淡青灰色	口縁部外方に折れる	内外面 ヨコナデ、外面ス入付物	O9区
124	土鍋	-	-	-	長石・黄閃石・その他、 (内)淡褐色 (内)淡褐色	口縁部外方に折れる	内面 板状工具によるヨコナデ、 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	9号土溝

第43回 その他 検出(3)

番号	器種	法量 (cm)			胎土色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
125	須恵器二輪鉢	(1.3)	-	-	長石・黄閃石・石英、白色粒 灰色	口縁部上方に上に引き上げ、尖り突 出	内面 ヨコナデ、口縁部をナデ 滑す 外面 ヘラ状工具によるヨコナ デ、板状工具によるヨコナデ、板 状工具によるヨコナデ、板 状工具によるナデ	D91
126	須恵器二輪鉢	-	-	-	長石・黄閃石・石英、赤色粒 灰色	125と同一器種か	内面 板状工具によるヨコナデ 外面 ヘラ工具によるナデ、一部 ヨコナデ	D91
127	須恵器二輪鉢	-	-	-	長石・黄閃石、 黄灰色	口縁部玉縁状をなす	内外面 ヨコナデ	8区
128	五段土器火鉢	(42.0)	-	-	長石・黄閃石、 淡青灰色	口縁下に2条の突帯とスタンプ文	内面 ヨコナデ、ミガキ 外面 ヨコナデ、ミガキ	E71
129	五段土器火鉢	-	(24.0)	-	長石・黄閃石 内淡灰色	底部は高台状をなす	内面 ヨコナデ 外面 ミガキ、ヨコナデ、底部摩 擦	D4

第49回 調査区南隣

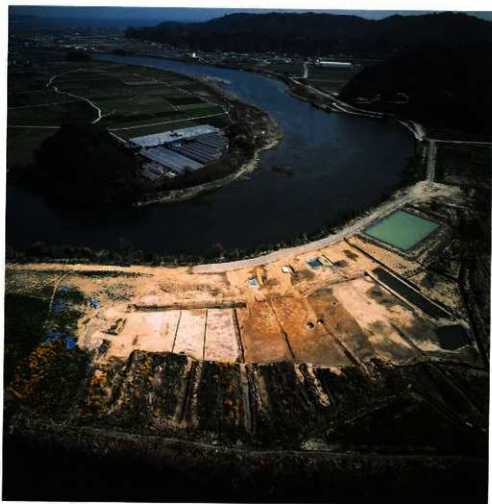
番号	器種	法量 (cm)			胎土色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
130	弥生式土器蓋	(14.6)	-	-	砂粒・長石・黄閃石・赤色粒 子	口縁部外反気味	内外面 ヨコナデ	2区
131	弥生式土器蓋	-	5.2	-	砂粒・長石・石英・黄閃石・石 粒、 灰白色	上げ底の底部	内面 ヨコナデ、底面ケズリ 外面 ナデ、タテナリ状のナデ	2区
132	弥生式土器蓋	-	4.5	-	長石・黄閃石・石英、白色粒 子、 内淡褐色	-	内面 タテナリ、ナデ、ユビオサ エ、ユビオサ 外面 タテナリ、ヨコナデ、ナデ	2区
133	須恵器杯	-	8.0	-	長石・その他砂粒、 淡青褐色	断面方形の高台を体部下に付す	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部へラ切り磨 ナデ	2号
134	須恵器蓋	-	-	-	石英・砂粒、 淡青灰色	底部に2条の立線	内外面 ヨコナデ	2区
135	須恵器蓋	(22.6)	-	-	石英などを含む、 淡青灰色	口縁の字に折れる	内面 同心円タタキ、ヨコナデ 外面 格子タタキ、ヨコナデ	2区
136	須恵器蓋	-	-	-	長石・石英・黄閃石・淡青灰色 の石粒、 黄灰色	-	内面 工具によるヨコナデ 外面 平行タタキ	2区
137	須恵器蓋	-	-	-	長石・黄閃石・石英、 内淡灰色 (内)淡褐色	-	内面 同心円タタキ 外面 格子目タタキ	2区
138	阿波瀬窯 青磁鉢	(11.2)	-	2.2	アモ色の釉	底部露出	-	2区
139	土師式土器杯	-	(6.4)	-	長石・黄閃石・石英・金雲母、 褐色	底部は底立気味	内面 網りともよなナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、底部丸切り	2区
140	陶器燗鉢	-	(13.4)	-	長石・黄閃石・白色粒 子、淡褐色	内面に窓状窪	外面 ヨコナデ、丸切り	2区

第51回 表層

番号	器種	法量 (cm)			胎土色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
142	土師器杯	-	(6.6)	-	長石・黄閃石・その他、 内淡灰色 (内)淡褐色	底部底立気味	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、へら切り	
143	須恵器杯	-	(10.0)	-	石英・黒褐色粒 子、淡青灰色	断面方形の高台を体部下に付す	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
144	土師器杯	-	-	-	長石・黄閃石・その他、 白褐色	口縁部短く外反	内外面 丁寧なミガキ	

145	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・石英 濃茶褐色	口縁部外方に折れる	内面 ココナデ 外面 ココナデ、ユビオサエ	
146	土師質土器片	(10.2)	(6.8)	2.6	長石・角閃石・白色粘土、 濃茶褐色	体部の立ちあがりは急	内面 ココナデ、ナデ 外面 ココナデ、ナデ	
147	土師質土器片	-	(8.5)	-	長石・角閃石・石英、 濃褐色	体部の立ちあがりは急	内面 ココナデ、濃茶ナデ 外面 ココナデ、濃茶糸切り	
148	土師質土器片	-	(7.8)	-	長石・角閃石・金雲母・石英、 褐色	体部の立ちあがりは急	内面 ヘラ状工具によるココナ デ、底面不定方向のナデ 外葉 ココナデ、濃茶糸切り	
149	土鍋	-	-	-	長石・角閃石・白色粘土・その他、 (内)濃茶褐色 外)濃茶褐色	口縁部は緩やかに外方に折れる	内面 ココナデ 外面 ココナデ、板状工具による ナデナデ	
150	肥前福壽 産付録	(6.8)	-	-	-	-	産部欠損	

写真図版



八坂久保田遺跡全景（西から）



八坂久保田遺跡全景（真上から）



八坂久保田遺跡全景（真上から）



八坂久保田遺跡井戸1、井戸2



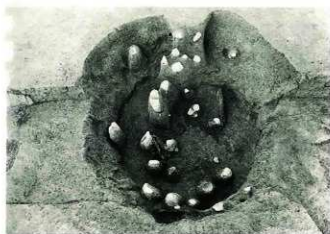
八坂久保田遺跡井戸1 遺物出土状況



八坂久保田遺跡井戸1 完掘状況



八坂久保田遺跡井戸1 井戸枠の木組み



八坂久保田遺跡井戸2 遺物出土状況



八坂久保田遺跡井戸2 土層



八坂久保田遺跡井戸2 完掘状況



八坂久保田遺跡井戸3



八坂久保田遺跡土擴 3



八坂久保田遺跡土擴 8



八坂久保田遺跡土擴 10



八坂久保田遺跡集石 1



八坂久保田遺跡溝 2、溝 3



八坂久保田遺跡溝 4



八坂久保田遺跡15層上面牛の足跡 (1)



八坂久保田遺跡15層上面牛の足跡 (2)



八坂久保田遺跡井戸 1 16



八坂久保田遺跡井戸 1 9



八坂久保田遺跡井戸 1 17



八坂久保田遺跡井戸 1 32



八坂久保田遺跡井戸 2 54



八坂久保田遺跡井戸 2 54上面



八坂久保田遺跡井戸 2 55



八坂久保田遺跡井戸 2 48



八坂久保田遺跡土擴 4 66



八坂久保田遺跡土擴 5 68



八坂久保田遺跡建物 6 5



八坂久保田遺跡建物 6 5 上面



八坂久保田遺跡建物 6 5 下面



八坂久保田遺跡土擴 2 61



八坂久保田遺跡 115



八坂久保田遺跡 116